第３章　大友氏遺跡及び整備計画地の概要と課題

1. 史跡指定の状況

本市では、広大な大友氏遺跡の史跡指定について、事前の発掘調査によってその存在が明らかとなった範囲の中から、都市計画事業との調整を図りつつ優先順位を検討し、各種条件が揃った場所から指定地の拡大を進めてきた。

大友氏館跡の庭園遺構が発見された地点ほかを対象として、平成 13 年（2001）8 月 13 日に第 1 次指定が行われたのを皮切りに、第 20 次となる令和 5 年（2023）3 月 20 日の追加指定まで継続的に行われている。

指定の範囲は、当初は大友氏館跡・旧万寿寺地区を中心に進められた。最近では上原館跡（第 14 次）、推定御蔵場跡（第 15 次）、唐人町跡（第 16 次）にも対象地区を広げ、その後、令和 3（2021）年度に旧万寿寺地区（第 18･19 次）、令和 4（2022）年度に唐人町跡（第 20 次）の追加指定が行われた。

なお、史跡の指定名称は、第 5 次指定にあたる、平成 17 年（2005）3 月 2 日付の旧万寿寺地区の追加指定に伴い、「大友氏館跡」から「大友氏遺跡」に変更された（指定範囲は図 3-1 参照）。

表３-1　史跡指定の面積一覧

対象地区	指定面積（㎡）
大友氏館跡	34,850.74㎡
旧万寿寺地区	52,499.89㎡
上原館跡	4,292.27㎡
推定御蔵場跡	3,757.00㎡
唐人町跡	1,776.84㎡
合　計	97,176.74㎡

令和 5（2023）年 12 月末現在

2. これまでの史跡整備への取組

（1）史跡指定後の歴史公園整備に向けた経緯

①大友氏遺跡の保存の取組

保護の取り組みは大友氏館跡の庭園遺構が発見された平成 10（1998）年度を契機に始まり、文化財保護とまちづくりの両面から様々な検討や調整を行いつつ、史跡指定範囲や歴史公園の範囲を拡張してきた。現在の史跡指定の面積は、合計約 9.7ha となっている。

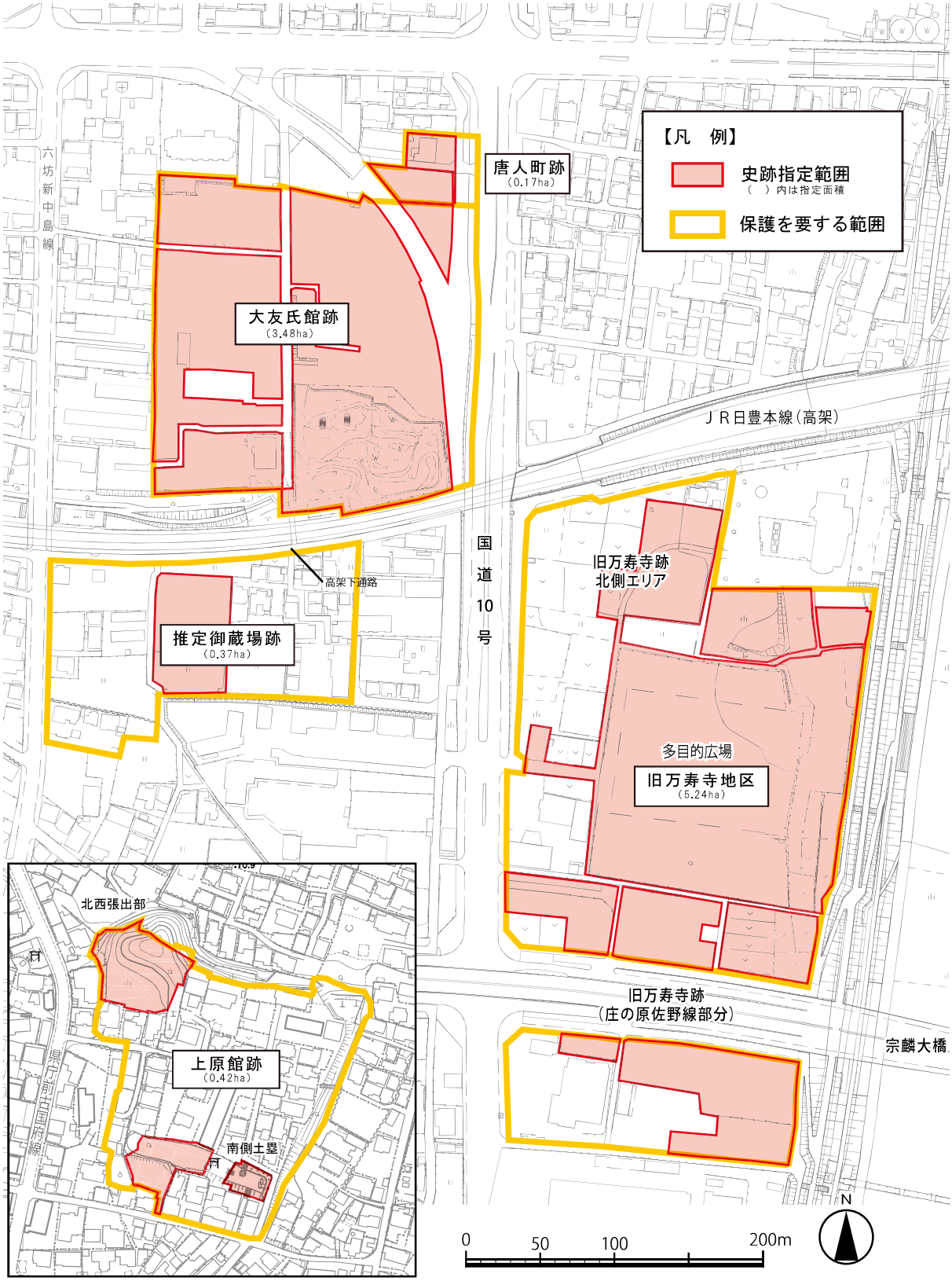


図 3-1　史跡大友氏遺跡指定範囲図

また、本市では、保護を要する範囲の拡大を進めつつ、主に大友氏館跡を対象範囲とした整備事業に向けた検討も行ってきた。平成 16（2004）年度に大分市中心部のまちづくりを目的とした「おおいた都心まちづくり会議」が、市長部局関連課の連携によって組織されたことから、教育委員会では、協調する組織として「大友氏を活かしたまちづくり検討委員会」（委員長：河原純之）を設定した。検討結果は、平成 17（2005）年度末に報告されている。この報告の提言を踏まえ、「大友氏館跡」区域の復元整備の具体化に向けた調査として、平成 24（2012）年度から庭園域の発掘調査を行った。引き続いて平成 29（2017）年度からは中心建物域の発掘調査を行った。

②都市計画上の取組

平成 19 年（2007）1 月 26 日には大友氏館跡を含む公園予定地内の 3.68ha について都市計画公園事業として認可を受けた。その後、平成 21 年（2009）12 月 18 日、平成 24 年（2012）5 月 7 日に史跡の追加指定を受けた箇所について都市計画公園事業の認可範囲にも追加された。さらに、平成 28 年（2016）3 月 15 日、令和 2 年（2020）3 月 31 日、令和 3 年（2021）9 月 24 日にも都市計画公園事業の許可範囲が順次追加され、これにより現在の都市計画公園事業認可範囲は 10.52ha となっている。

③大友氏遺跡の保存と整備に向けた本格的な取組

平成 24 年（2012）年度には保存管理計画と整備基本構想の検討に着手し、平成 25（2013）年度には「大友氏遺跡保存管理計画・整備基本構想検討委員会」を設置し、平成 26 年（2014）3 月 31 日に大友氏遺跡保存管理計画を策定した。また、同年度には、庁内関係課 17 課（令和 4 年度から 21 課）で構成する「大友氏を活かしたまちづくり庁内検討委員会」を設置して歴史公園整備に向けた具体的な検討に着手している。平成 26（2014）年度には「史跡大友氏遺跡整備基本計画検討委員会」を設置し、指導・助言を受けながら、平成 27 年（2015）12 月に「史跡大友氏遺跡整備基本計画（第 1 期）」を策定した。この計画では第 1 期整備として短期整備（概ね 5 年）と中期整備（概ね 10 年）で主に大友氏館跡を中心とした整備を行うこととしている。

基本計画に基づく具体的な整備にあたっては、平成 27（2015）年度に設置した「大友氏館跡庭園整備検討委員会」や、平成 28（2016）年度に設置した「史跡大友氏遺跡整備検討委員会」から整備内容に関する指導・助言を得ながら事業を進めている。

令和 2 年（2020）3 月に完成した「大友氏館跡庭園」についても、前述の委員会から指導・助言のもと、平成 28（2016）年度に基本設計、平成 29（2017）年度に実施設計を行い、平成 30（2018）年度から整備工事に着手し、令和 2 年（2020）6 月から一般公開している。また、令和 2（2020）年度より大友氏館跡の中心建物等の立体復元を目指すため、「大友氏館跡建造物等復元検討委員会」を設置し、検討を進めている。大友氏館跡、唐人町跡、歴史文化観光拠点施設、利便施設等について、第 1 期整備計画が終了する令和 22 年（2040）までの完成に向けて検討を進めている。

表 3-2　大友氏遺跡の保存活用に関する履歴一覧

年月日（年次）	項　　目
平成 10(1998) 年度	大分駅周辺総合整備事業に伴う代替地にて大友氏館跡庭園跡確認
平成 11(1999) 年 3 月	国指定史跡として保存の方向性が打ち出される
平成 11(1999) 年度	国庫補助事業による大友氏館跡範囲確認調査を開始
平成 11(1999) 年 8 月 18 日	市長の諮問機関として「大友氏遺跡検討委員会」を設置
平成 13(2001) 年 8 月 13 日	大友氏館跡の一部について、国史跡の指定を受ける
平成 13(2001) 年度	指定後、史跡指定地の公有化に着手
平成 14(2002) 年 3 月 31 日	「大友遺跡検討委員会報告書 - 大友遺跡群活用まちづくり検討報告 - 」 が提出される
平成 17(2005) 年 3 月 2 日	旧万寿寺地区の追加指定（第 5 次） 史跡指定名称が「大友氏遺跡」に改称される
平成 18(2006) 年 3 月 31 日	都市計画法による公園区域指定 ⇒『大友氏館跡歴史公園』（約 6.5ha）
平成 18(2006) 年 3 月 31 日	「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会報告書」が提出される
平成 19(2007) 年 1 月 26 日	都市計画法による都市計画公園事業認可 ⇒『大友氏館跡歴史公園』（大友氏館跡の一部：3.68ha）
平成 20(2008) 年 4 月 25 日	旧万寿寺地区に、大友氏遺跡体験学習館をオープン
平成 21(2009) 年 12 月 18 日	都市計画法による都市計画公園事業の変更認可 ⇒『大友氏館跡歴史公園』（従来の範囲に大友氏館跡南端を一部追加：4.09ha）
平成 23(2011) 年 3 月 28 日	都市計画法による公園区域の変更 ⇒『大友氏館跡歴史公園』（大友氏館跡に推定御蔵場跡を追加：計約 9.5ha）
平成 24(2012) 年 3 月 13 日	都市計画法による公園区域の変更 ⇒『大友氏館跡歴史公園』（旧万寿寺地区を追加：計約 17.5ha）
平成 24(2012) 年 5 月 7 日	都市計画法による都市計画公園事業の変更認可 ⇒『大友氏遺跡歴史公園』（旧万寿寺地区の一部を追加：8.55ha）
平成 25(2013) 年 10 月 15 日	「大友氏遺跡保存管理計画・整備基本構想検討委員会」の設置
平成 25(2013) 年 12 月 16 日	市役所庁内に「大友氏を活かしたまちづくり庁内検討委員会」の設置
平成 26(2014) 年 3 月 31 日	史跡大友氏遺跡保存管理計画の策定
平成 26(2014) 年 6 月 17 日	「史跡大友氏遺跡整備基本計画検討委員会」の設置
平成 26(2014) 年 10 月 6 日	上原館跡の追加指定（第 14 次）
平成 27(2015) 年 10 月 7 日	推定御蔵場跡の追加指定（第 15 次）
平成 27(2015) 年 12 月 24 日	史跡大友氏遺跡整備基本計画（第 1 期）の策定
平成 28(2016) 年 1 月 6 日	「大友氏館跡庭園整備検討委員会」の設置
平成 28(2016) 年 6 月 9 日	「史跡大友氏遺跡整備検討委員会」の設置
平成 29(2017) 年 2 月 9 日	唐人町跡の追加指定（第 16 次）
平成 30(2018) 年 2 月 13 日	大友氏館跡南側の鉄道残存敷の追加指定（第 17 次）
平成 30(2018) 年 8 月	大友氏館跡庭園跡整備工事に着工
平成 30(2018) 年 9 月 30 日	大友氏館跡内に南蛮 BVNGO 交流館オープン
令和 2(2020) 年 6 月 5 日	大友氏館跡庭園供用開始
令和 3(2021) 年 10 月 11 日	旧万寿寺地区の追加指定（第 18 次）
令和 4(2022) 年 3 月 15 日	旧万寿寺地区の追加指定（第 19 次）
令和 5(2023) 年 3 月 20 日	唐人町跡の追加指定（第 20 次）

（2）公有化の状況

本市では平成 13（2001）年度の史跡指定以後、大友氏遺跡の史跡購入事業を開始した。令和 4（2022）年度末時点で保護を要する範囲に対し、約 5 割の史跡指定を完了し、また指定地の殆どについて公有化を完了している。このうち大友氏館跡は、史跡指定と公有化が最も進んでおり、指定・公有化ともに 75％を超えているが、上原館跡と推定御蔵場跡は 20% 未満の公有化に留まっている。

表 3-3　史跡指定面積と公有化面積（令和 5 [2023] 年 12 月末）

	保護を要する範囲	史跡指定面積（登記簿面積）（保護を要する範囲に対する割合%）	公有化面積（実測面積）（保護を要する範囲に対する割合%）
大友氏館跡	46,000㎡	34,850.74㎡（75.76%）	35,639.24㎡（77.48%）
旧万寿寺地区	79,000㎡	52,499.89㎡（66.46%）	44,155.12㎡（55.89%）
上原館跡	24,000㎡	4,292.27㎡（17.88%）	4,676.91㎡（19.49%）
推定御蔵場跡	22,000㎡	3,757.00㎡（17.08%）	4,012.66㎡（18.24%）
唐人町跡	2,200㎡	1,776.84㎡（80.77%）	946.52㎡（43.02%）
合　計	173,200㎡	97,176.74㎡（56.11%）	89,430.45㎡（51.63%）

（3）暫定公開

公有化が完了した箇所については、本市が所有者として管理にあたっている。本格的な史跡整備に着手するまでの間にも史跡の活用を図るため、平成 14 年（2002）に大友氏館跡に説明板を設置し、平成 20 年（2008）4 月には旧万寿寺地区に大友氏遺跡を中心とする情報発信と学習のための仮ガイダンス施設「大友氏遺跡体験学習館」を設置した。その後、平成 30 年（2018）8 月末までの間「大友氏遺跡体験学習館」を拠点として史跡地の活用が行われるようになり、年間利用者は徐々に増え、概ね 9 千人台で推移した。

平成 30 年（2018）に大友氏館跡庭園遺構の整備計画が具体化したことをうけて、大友氏館跡での情報発信拠点の整備が必要となったことから「大友宗麟が生きた時代を体感できる施設」をコンセプトに、大友氏遺跡や大友宗麟の功績について、従来の体験学習機能に加えて工夫を凝らした展示や迫力ある映像で紹介する「南蛮ＢＶＮＧＯ交流館」を同年 9 月に設置した。ここは大友氏遺跡史跡ボランティアガイドの活動拠点等にもなっており、幅広い層の来訪者に対応した施設として、令和 4（2022）年度には 1 万 8 千人の方が訪れている。

（4）情報発信

大友氏遺跡の情報発信については、ガイダンス施設「南蛮ＢＶＮＧＯ交流館」を

拠点とした活動のほか、調査研究成果の公表、発掘調査の現地説明会、大分市歴史資料館における特別展、大友宗麟と戦国時代の豊後地方に関する紹介を含むシンポジウムや講演会の開催等、様々な普及啓発活動を行っている。

平成 29 年（2017）より、市民参加による史跡活用事業として、大友氏遺跡史跡ボランティアガイド事業を実施している。知識研修や接遇研修、修了試験を経てボランティアガイドとして登録し、南蛮ＢＶＮＧＯ交流館や整備された大友氏館跡庭園のガイドを中心に行い、来訪者に対し大友氏遺跡の魅力を発信している。

南蛮ＢＶＮＧＯ交流館では、子ども向けのクイズラリーや出土品等の遺物展示、ボランティアガイドを中心としたイベント（大おもて会）の実施のほか、「豊後大友宗麟鉄砲隊」と連携した火縄銃の発砲演武を開催している。また、新春大友みくじ（おみくじ）や御城印の配布等、年間を通じて様々な催しを企画・運営している。

大友氏館跡以外でも戦国時代の府内のまちの各所に町名サインの設置を行うとともに、戦国時代の府内のまちが描かれた「府内古図」をもとに、楽しく散策できるマップを制作し、まち歩きの増加につなげている。

令和 5 年（2023）6 月から一般公開を開始した「大分市デジタルアーカイブ～おおいたの記憶～」は、大分市内の有形無形の文化財や史跡、伝統芸能や景観等の文化資源の継承と活用を目的としており、その中に「大友氏と大友氏遺跡」というコンテンツを

発掘調査現地説明会の様子

ボランティアガイドによる解説

大友杏葉武将隊（豊後大友宗麟鉄砲隊）
のおもてなし＆火縄銃の発砲演武

南蛮 BVNGO 交流館「新春大友みくじ」

府内古図でまちあるき

府内古図でまちあるき
参加特典クリアファイル

設け、大友氏遺跡や整備事業の紹介の他、大友氏関連の古文書や古絵図、写真や刊行物等の公開を行っている。さらに「3D ミュージアム」では「国崩し」と「華南三彩貼花唐草文五耳壺」の 3D モデルを公開しており、いつでも・どこでも大友氏関連資料に触れることができるような情報発信を始めている。

出前授業の様子

（5）学校教育との連携

大友氏遺跡への理解と愛着の醸成を促す取り組みは、学校教育と連携し、長期的な視野に立って行っている。平成 25（2013）年度から大友宗麟副読本作成事業として、市内全域の小学校 6 年生を対象に社会科副読本『府内から世界へ　大友宗麟』を配布し、授業カリキュラムに組み込んでいる。すでに実施を行って 10 年以上が経過し、副読本で学んだ子どもたちの中には成人を迎えた人もいる。近年に市民アンケートでは若年層において郷土に対する理解度が高まっていることが読み取れることからも、今後も副読本や副読本を活用した出前授業といった学校教育と連携した取組を継続していくことが大切となっている。

ジュニアガイドによる解説
（大友氏館跡庭園）

平成 29 年（2017）からは、子どもたちが郷土に対する理解と愛着を深めてもらい、大分の未来を担う次世代の育成を図ることを目的に、社会科副読本『府内から世界へ　大友宗麟』を出題範囲とした「ＦＵＮＡＩジュニア検定」を実施している。合格者は希望者をＦＵＮＡＩジュニアガイドとして養成し、検定やガイド研修で学んだ知識をイベント等で積極的に発信している。

シールラリー開催時の
ジュニアガイドの様子

令和 5 年（2023）4 月時点では登録者が 22 名となり、令和 5 年（2023）5 月に開催した「ＦＵＮＡＩジュニアガイドと見つけよう！歴史発見シールラリー」では、大友氏館跡庭園をはじめ、若宮八幡宮や来迎寺のガイドを行ったほか、10 月にはＪＲが企画するウォーキングイベントに参加し、大分駅周辺に点在する大友氏関連史跡のガイドを実施した。

歴史発見シールラリーチラシ

3. 各地区の発掘調査等の経過と概要

大友氏遺跡に含まれる、大友氏館跡・唐人町跡・推定御蔵場跡・旧万寿寺地区・上原館跡の５つの遺跡について、それぞれの調査経過と概要を述べる。調査履歴については、遺跡ごとに表 3-4 ～ 3-8 にまとめている。調査次数は大友氏館跡を「館○次」、中世大友府内町跡を「町○次」、旧万寿寺地区を「万○次」と略して表記した。

表 3-4　大友氏館跡発掘調査一覧表（令和 5 年 12 月末現在）

調査次数	地区	保護を要する範囲（内外区分）	調査原因	調査面積（㎡）	調査年度	報告書等	刊行年
館 1 次	庭園域	内	大分駅周辺総合整備事業	2200	平成 12~13 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 2 次	西外郭域・西建物域	内	民間［マンション建設］	557	平成 10~11 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 3 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	173.16	平成 11 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 4 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	100	平成 11 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 5 次	西外郭域・西建物域	内	重要遺跡確認調査	50	平成 11 年度	概報 I	平成 13 年 3 月
館 6 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	283	平成 12 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 7 次	北外郭域	内	重要遺跡確認調査	121	平成 12 年度	大友氏館跡 1	平成 27 年 3 月
館 8 次	北西域	内	重要遺跡確認調査	60	平成 12 年度	概報 II	平成 13 年 3 月
館 9 次	北外郭域	内	重要遺跡確認調査	6.5	平成 11~12 年度	大友氏館跡 1	平成 27 年 3 月
館 10 次	北建物域	内	重要遺跡確認調査	75	平成 13 年度	大友氏館跡 1	平成 27 年 3 月
館 11 次	中央部	内	重要遺跡確認調査	48.5	平成 13 年度	大友氏館跡 1	平成 27 年 3 月
館 12 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	550	平成 14 年度	概報 2002 年度	平成 15 年 3 月
館 13 次	北建物域	内	重要遺跡確認調査	486	平成 15 年度	概報 2003 年度	平成 16 年 3 月
館 14 次	北建物域	内	重要遺跡確認調査	150	平成 16 年度	概報 2003 年度	平成 16 年 3 月
館 15 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	70	平成 15 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 16 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	320	平成 16 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 17 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	700	平成 17~18 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 18 次	北外郭域	内	重要遺跡確認調査	60	平成 17 年度	大友氏館跡 1	平成 27 年 3 月
館 19 次	西外郭域・西建物域	内	重要遺跡確認調査	419	平成 18 年度	概報 2006 年度	平成 19 年 3 月
館 20 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	650	平成 19 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 21 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	523	平成 20 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 22 次	東外郭域	内	重要遺跡確認調査	204.2	平成 21 年度	大友氏館跡 1	平成 27 年 3 月
館 23 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	540	平成 22 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 24 次	北建物域	内	重要遺跡確認調査	28	平成 22 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 25 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	498.1	平成 23 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 26 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	754.4	平成 23 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 27 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	110.4	平成 23 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 28 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	1860.6	平成 24 年度	大友氏館跡 1 大友氏館跡 2	平成 27 年 3 月 平成 29 年 1 月
館 29 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	1567	平成 25 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 30 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	508.1	平成 25 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 31 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	3074.5	平成 26 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 32 次	庭園域・南外郭域	内	重要遺跡確認調査	300	平成 26 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 33 次	庭園域・中心建物域	内	重要遺跡確認調査	5200	平成 27 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 34 次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	540	平成 28 年度	大友氏館跡 2	平成 29 年 1 月
館 35 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	2750	平成 28 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 36 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	1820	平成 29 年度	大友氏館跡 3	平成 31 年 3 月
館 37 次	中心建物域・西建物域	内	重要遺跡確認調査	450	平成 29 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 38 次	北建物域	内	重要遺跡確認調査	2000	平成 30 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 39 次	西建物域	内	重要遺跡確認調査	500	平成 30 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 40 次	東外郭域・推定大門付近	内	重要遺跡確認調査	500	令和元年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 41 次	北建物域・北外郭域	内	重要遺跡確認調査	700	令和元年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 42 次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	10	令和 2 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 43 次	北西域・西建物域	内	重要遺跡確認調査	540	令和 2 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 44 次	西建物域	内	重要遺跡確認調査	1296	令和 3 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 45 次	東外郭域	内	重要遺跡確認調査	496	令和 3 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 46 次	南外郭域	内	重要遺跡確認調査	1196	令和 4 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 47 次	北外郭域・北建物域	内	重要遺跡確認調査	600	令和 4 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 48 次	東外郭域・北建物域	内	重要遺跡確認調査	1000	令和 5 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
館 49 次	北建物域	内	重要遺跡確認調査	2216	令和 5 年度	大友氏館跡 4	刊行予定
町 63 次 A 区	南外郭域	内	重要遺跡確認調査	20	平成 18 年度	概報 2006 年度	平成 19 年 3 月
町 63 次 C 区	西側建物想定域	内	重要遺跡確認調査	38	平成 18 年度	概報 2006 年度	平成 19 年 3 月
町 56 次	西端	外	重要遺跡確認調査	76	平成 17 年度	概報 2005 年度	平成 18 年 3 月
町 66 次	西端	外	重要遺跡確認調査	48	平成 18 年度	概報 2006 年度	平成 19 年 3 月
町 12 次	館外東側	内　一部外	国道 10 号古国府拡幅事業	700	平成 13 年度	豊後府内 4（第 1 分冊）	平成 18 年 3 月
町 18 次（西）	館外東側	内　一部外	国道 10 号古国府拡幅事業	450	平成 13 年度	豊後府内 4（第 1 分冊）	平成 18 年 3 月
町 52 次	館外東側	内　一部外	国道 10 号古国府拡幅事業	1000	平成 17 年度	豊後府内 15	平成 22 年 3 月
町 91 次	館外東側	内　一部外	国道 10 号古国府拡幅事業	240	平成 22 年度	豊後府内 18	平成 25 年 3 月
町 92 次	館外東側	内　一部外	国道 10 号古国府拡幅事業	644	平成 22 年度	豊後府内 18	平成 25 年 3 月
町 93 次	館外東側	内　一部外	国道 10 号古国府拡幅事業	93	平成 24 年度	豊後府内 18	平成 25 年 3 月
町 118 次	西外郭域	外	個人住宅建設	10	平成 27 年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2016	平成 25 年 3 月

表 3-5　唐人町跡発掘調査一覧表（令和 5 年 12 月末現在）

調　査 次　数	地　区	保護を要する範囲 内外区分	調査原因	調査面積 （㎡）	調査年度	報告書等	刊行年
町 14 次	西側	内	民間 [マンション建設]	125	平成 13 年度	大友府内 6	平成 15 年 3 月
町 11 次	東側	外　一部歴史公園内	国道 10 号古国府拡幅事業	700	平成 13 年度	豊後府内 17（第 1 分冊）	平成 25 年 3 月
町 48 次	東側	外　一部歴史公園内	国道 10 号古国府拡幅事業	70	平成 16 年度	豊後府内 4（第 1 分冊）	平成 18 年 3 月
町 72 次	東側	外	国道 10 号古国府拡幅事業	300	平成 18 年度	豊後府内 17（第 1 分冊）	平成 25 年 3 月
町 80 次	東側	外　一部歴史公園内	国道 10 号古国府拡幅事業	870	平成 19 年度	豊後府内 17（第 1 分冊）	平成 25 年 3 月
町 88 次	東側	外	国道 10 号古国府拡幅事業	2028	平成 22 年度	豊後府内 17（第 2 分冊）	平成 25 年 3 月
町 161 次	西側	外	重要遺跡確認調査	22	令和 4 年度		

「町」：中世大友府内町跡の略

表 3-6　旧万寿寺地区発掘調査一覧表（令和 5 年 12 月末現在）

調　査 次　数	地　区	保護を要する範囲 内外区分	調査原因	調査面積 （㎡）	調査年度	報告書等	刊行年
万 1 次	境内中央東側	内	重要遺跡確認調査	388	平成 17 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 17	平成 18 年 12 月
万 2 次	万寿寺北側（堀之口町）	内	重要遺跡確認調査	270	平成 18 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 18	平成 19 年 12 月
万 3 次	境内北東部	内	重要遺跡確認調査	365	平成 18 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 18	平成 19 年 12 月
万 4 次	境内中央	内	重要遺跡確認調査	240	平成 19 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 19	平成 20 年 3 月
万 5 次	境内中央	内	重要遺跡確認調査	185	平成 20~21 年度	大分市市内確認調査概報 2008	平成 22 年 3 月
万 6 次	境内西側	外	庄の原佐野線	1366	平成 23 年度	蒋山万寿寺跡 (第 1 分冊)	平成 31 年 3 月
万 7 次	境内西側	外	庄の原佐野線	632	平成 25 年度	蒋山万寿寺跡 (第 1 分冊)	平成 31 年 3 月
万 8 次	境内西側	外	庄の原佐野線	1000	平成 26 年度	蒋山万寿寺跡 (第 2 分冊)	平成 31 年 3 月
万 9 次	境内東側	外	庄の原佐野線	660	平成 26 年度	蒋山万寿寺跡 (第 2 分冊)	平成 31 年 3 月
万 10 次	境内南側中央	外	庄の原佐野線	6100	平成 27 年度	蒋山万寿寺跡 (第 2 分冊)	平成 31 年 3 月
万 11 次	境内東側	外	重要遺跡確認調査	120	令和 3 年度		
万 12 次	境内東側	外	重要遺跡確認調査	320	令和 4 年度		
町 6 次	境内南側中央	内	民間開発	1600	平成 12~13 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 12	平成 13 年 12 月
町 23 次	境内中央	内	重要遺跡確認調査	1623	平成 14 年度	大分市市内確認調査概報 2002	平成 15 年 3 月
町 24 次	境内南側	内	範囲確認調査	57.6	平成 14 年度	大分市市内確認調査概報 2002	平成 15 年 3 月
町 20 次	境内北西部	外	国道 10 号拡幅	2100	平成 14 年度	豊後府内 7	平成 19 年 3 月
町 34 次	万寿寺西端	外	国道 10 号拡幅	700	平成 15 年度	豊後府内 8	平成 20 年 3 月
町 35 次	境内南西部	外	国道 10 号拡幅	500	平成 15 年度	豊後府内 12	平成 21 年 3 月
町 42 次	境内西側	外	国道 10 号拡幅	150	平成 16 年度	豊後府内 12	平成 21 年 3 月
町 43 次	万寿寺西端	外	国道 10 号拡幅	400	平成 16 年度	豊後府内 8	平成 20 年 3 月
町 51 次	万寿寺北西隅部	外	国道 10 号拡幅	2500	平成 17 年度	豊後府内 15	平成 22 年 3 月
町 53 次	西側堀	外	国道 10 号拡幅	192.4	平成 17 年度	大友府内 13	平成 21 年 3 月
町 60 次	西側堀	外	国道 10 号拡幅	156.15	平成 17 年度	大友府内 13	平成 21 年 3 月
町 68 次	境内西側	外	国道 10 号拡幅	400	平成 18 年度	豊後府内 12	平成 21 年 3 月
町 73 次	西側堀	外	国道 10 号拡幅	329	平成 18 年度	大友府内 13	平成 21 年 3 月
町 87 次	万寿寺・寺小路町	外	国道 10 号拡幅	1604	平成 21 年度	大友府内 17	平成 23 年 3 月
町 139 次	第 2 南北街路沿い旧万寿寺の南西隅推定地	外	民間開発	66	平成 30 年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2020	令和 2 年 3 月

「万」：旧万寿寺跡、「町」：中世大友府内町跡の略

表 3-7　推定御蔵場発掘調査一覧表（令和 5 年 12 月末現在）

調　査 次　数	地　区	保護を要する範囲 内外区分	調査原因	調査面積 （㎡）	調査年度	報告書等	刊行年
町 37 次	御蔵場推定地	内	集合住宅建設	37	平成 15 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 15	平成 16 年 12 月
町 86 次	御蔵場推定地	内	範囲確認調査	2189	平成 21 年度	大分市市内遺跡確認調査概報 2009・2010	平成 23 年 3 月
町 89 次	御蔵場推定地	内	範囲確認調査	937.7	平成 22 年度	大分市市内遺跡確認調査概報 2009・2010	平成 23 年 3 月
町 5 次 A・B	御蔵場推定北辺境界ライン	外	JR 日豊本線・豊肥線高架	4200	平成 11~13 年度	豊後府内 2	平成 17 年 3 月
町 25 次 -8	上町	外	六坊新中島線拡幅工事	75	平成 17 年度	大友府内 9	平成 19 年 3 月
町 25 次 -10	上町	外	六坊新中島線拡幅工事	125	平成 18 年度	大友府内 12	平成 20 年 3 月
町 124 次	御蔵場推定地・柳町	内	民間開発	14	平成 28 年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2017	平成 30 年 3 月
町 142 次	御蔵場推定地	内	集合住宅建設	66.89	平成 30 年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2019	令和 2 年 3 月
町 143 次	御蔵場推定地	内	民間開発	18.6	令和元年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2020	令和 3 年 3 月
町 145 次	御蔵場推定地	内	民間開発	60.2	令和元年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2020	令和 3 年 3 月
町 153 次	御蔵場推定地	内	民間開発	13.8	令和 3 年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2021	令和 4 年 3 月
町 155 次	御蔵場推定地・ノコギリ町	外	民間開発	81.9	令和 3 年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2021	令和 4 年 3 月

「町」：中世大友府内町跡の略

表 3-8　上原館跡発掘調査一覧表（令和 5 年 12 月末現在）

調　査 次　数	地　区	保護を要する範囲 内外区分	調査原因	調査面積 （㎡）	調査年度	報告書等	刊行年
1 次	館南東隅	内	史跡整備	93.03	平成 5 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 4	平成 5 年 12 月
2 次	館中央～南東部	内	汚水・雨水施設	100	平成 11 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 11	平成 12 年 12 月
3 次	館南西部	内	個人住宅建設	60	平成 11 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 11	平成 12 年 12 月
4 次	館内北側	内	個人住宅建設	20	平成 12 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 12	平成 13 年 12 月
5 次	館内北側	内	汚水・雨水施設	60.7	平成 12 年度	大分市埋蔵文化財調査年報 12	平成 13 年 12 月
6 次	館内北西部	内	集合住宅建設	25.4	平成 21 年度	大分市埋蔵文化財調査概報 2010	平成 22 年 12 月
7 次	館西側	内	集合住宅建設	6	平成 26 年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2015	平成 28 年 3 月

（1）大友氏館跡

大友氏館跡は、戦国時代の豊後府内のほぼ中央に位置し、大友氏の領国支配の拠点として 14 世紀後半から末（10 代親世の頃）以降整備され、16 世紀末の島津軍の豊後侵攻による廃絶まで継続的に営まれたと推定される。

大友館の規模は、16 世紀後半頃に約 200 m四方の最大規模となり、四囲は二条の溝や築地塀により囲まれ、敷地内の中央付近に、政務や儀礼・儀式の場である中心建物が配され、南東部には全国屈指の巨大な園池を伴う庭園が造営される。出土遺物は、饗宴・儀礼に用いられた莫大な量のかわらけの他に、元青花梅瓶や青磁夜型器台といった中国製高級陶磁器類が見られ、室町将軍同様に威信財としての唐物を珍重し、座敷を飾っていたと考えられる。こうした大友氏館跡の状況は、室町幕府の規範を遵守する守護館の典型を示すものとされる。

①発掘調査の経過

大友氏館跡の確認調査は、平成 10 年（1998）に庭園域から始まり、令和 5 年（2023）12 月末時点で、50 次調査まで行っている。発掘調査が開始された当初は、遺跡の範囲及び残存状況等の把握を主な目的であったことから、調査面積は平均 320㎡（市教委調査分）程度で、遺構の掘り下げも最小限に留めていた。しかし、大友氏館跡の整備に向けて事業が進み始めた平成 24（2012）年度以降、調査延べ面積は平均 1246㎡と広域な面積で調査を方針となった。それにより、史跡整備に必要な遺跡の情報は、短い期間で広く把握することができた。しかし、広域であるが故、検出される遺構は某大であるため、時間的な制約から掘り下げは必要な箇所のみと限定的にせざるを得ない状況となった。

②大友氏館跡の変遷

大友氏館跡は、これまでの調査によりⅠ期～Ⅵ期にわたる遺跡の変遷が明らかになっている。

Ⅰ期（14 世紀後半～ 15 世紀前半）

館南東部において遺構分布が顕著であり、大きく二つの掘立柱建物跡群が配置される。北側の建物群は、敷地の東側中央付近で認められる面的な整地の上に、7 尺基準で造られた主軸を 3°前後東に振り規格性が高い。一部の柱穴から礎盤石が出土する。南側建物群は、北側のグループと比べ、小規模であり柱配置にもばらつきが認められる。建物の周辺には土師器廃棄遺構が点在する。

これらの建物群はＬ字状の溝で囲まれており、この時期の館は 1 町四方程度の規模であった可能性が考えられる。また、北側の建物群の東側では門状の遺構がある。

Ⅱ期（15 世紀中葉～ 15 世紀後葉）

館中央部から東側で広範な盛土整地が行われ、その上面に掘立柱建物が形成され

るほか、整地土の中には人為的に封入された多量のかわらけが確認できる。以後、館中央部～東側の範囲で繰り返し整地が行われており、継続性の強い場であることから、大友館の中心的な施設が存在したことが想定される。その西側には南北方向の大規模な溝があり、この頃は南北２町、東西１町程度の規模であったと考えられる。

Ⅲ -1 期（15 世紀末葉～ 16 世紀初頭）

Ⅱ期に形成された盛土整地範囲内の一部で、掘り込みを伴う整地が行われ、整地周辺では、かわらけの廃棄土坑が形成される。Ⅱ期と同様に、掘り込み整地範囲内には中心的な建物が展開していた可能性がある。その北側には、主軸が１～３°東に振る掘立柱建物、東西方向の柵が建てられる。整地南側では、この時期の後半に池状遺構が構築されるが、規模等の詳細は不明である。西側エリアでは、長辺が１町程度を有す、口字状の大型区画施設が２区画築かれる。土師器埋納遺構や土師器廃棄遺構が点在し、南側の区画内部では柵の設置や盛土整地が行われる。この段階では、明確な建物群は認められていない。しかし、南側区画の敷地南域（中世大友府内町跡第５次）では、詳細不明だが、ピット群が無数に分布していることから建物域が広がっている可能性がある。

Ⅲ -2 期（16 世紀前葉）

館の中心部には浅い掘り込み整地が行われ、引き続き中心建物が建てられた可能性がある。北側にはこの頃出現する京都系土師器を主体とした廃棄土坑が複数形成される。また、中心建物の周囲は、断片的な箇所もあるが口字状に溝で囲まれる。西側の大規模区画施設は両区画とも継続する。

Ⅳ期（16 世紀中葉～後葉）

中心部で掘り込み整地が行われ、礎石建物が建てられる。中心建物には、京都系土師器を主体としたかわらけ廃棄土坑も継続して形成される。館北辺には２条の溝に挟まれた積み土状遺構が整備される。東外郭付近では当該期からⅤ期にかけて形成・使用された備前焼大甕２基を埋設した埋甕遺構が見つかっている。西側エリアは、前段階まであった大規模区画施設が埋められるとともに、西・南外郭を構成する区画溝が掘削される。西外郭溝の中央付近で東西方向の溝と並行して小規模な掘立柱建物が設置される。

Ⅴ期（1573 年頃～ 1586 年頃）

この頃までに館の規模が方２町（約 200 m四方）に拡張され、敷地は最大規模となる。

外郭については、東西南北それぞれで構造が判明している。北・南外郭の下部構造は幅 1.5 ～ 2.0 mの平行する２本の溝と、これに挟まれた幅約 4.0 ～ 4.5 mの空

間に粘質土と砂質土を交互に積み上げる。北外郭においては、北東部分で内溝が屈曲し、外溝は館外へと延び、第２南北街路が唐人町へとクランクする地点で交差する可能性があり、東外郭との接続構造の把握が課題である。東外郭は、築地塀の痕跡と考えられる砂・砂質土・小石（砂利）を４～5㎝厚で薄く突き固めた積み土状遺構が0.5ｍの厚さで検出されている。更に、その下部（東外郭基部）は、土壌改良のためと思われる、長さ約65ｍにわたって、最大幅約4.5+αｍ程度の規模を有する掘り込み整地が延伸する。また、その中で掘り込み整地が途切れる箇所が３地点あり、出入口の施設が想定される。西外郭は南西コーナー部が確認され、その地点で外溝はＴ字状に交差し館外（南方向）と庭園域の方向（南外郭）へと延びる。

庭園遺構は、東西67ｍ・南北30ｍの園池跡を伴う。園池跡は地表面を約２ｍ掘り下げ、最深部付近には１ｍを超える巨石を用い、護岸石及び景石として配置する。園池跡は中央付近で南北に延びる出島状の中島を境に、巨石を多く並べ置く東の景色と珍しい形をした景石を局地的に配した西側の景色に分かれる。花粉分析の結果から、多種多様な樹木を植栽していたことも確認された。

中心建物域には、中心建物となる大型の礎石建物跡、その東側には長さ約40ｍ、幅１ｍ、深さ約0.5ｍを呈す南北方向の区画溝が検出された。この区画溝と東外郭までの間は同時期の遺構が少ないことから空閑地（広場域）であった可能性がある。また、この空閑地では東西方向の仕切塀跡が確認されており、大門推定地から中心建物へ向かう通路であると考えらえる。中心建物の南側では不定形で東西方向に長い掘り込み整地の上面に、小規模な礎石遺構が存在する。さらに、その掘り込み整地内には舞台や楽屋といった施設が想定される。中心建物跡北側では、礎石は残存しないが掘り込み整地に伴う建物跡と推定される礎石建物跡が１棟、遺構が希薄な範囲があり、その周囲にかわらけ一括廃棄土坑が点在する。

南西部にも盛土整地の上面に掘り込み整地を行い建物跡が検出された。建物の周囲では土師器廃棄遺構が分布しており、屋敷空間であったことが窺える。さらに館に隣接する南西側には、長方形を呈する区画エリアが存在する。

Ⅵ期（1586～1602年頃）

島津氏による府内侵攻後に館は復興されず、第２南北街路沿いに面する館の敷地及び北外郭沿い（唐人町～御於北町）の敷地の一部は町屋域となる。館Ⅴ期の北外郭の溝は埋め戻され、瓦破片等で補強した後、道路として改修される。また、埋甕遺構や便所と想定される石組遺構、建物跡などが確認されており、島津侵攻後に復興している様子を見ることができる。江戸時代になり、府内城が整備されると復興した町屋ごと城下町へと移転し、水田や畠といった耕地へと変容する。

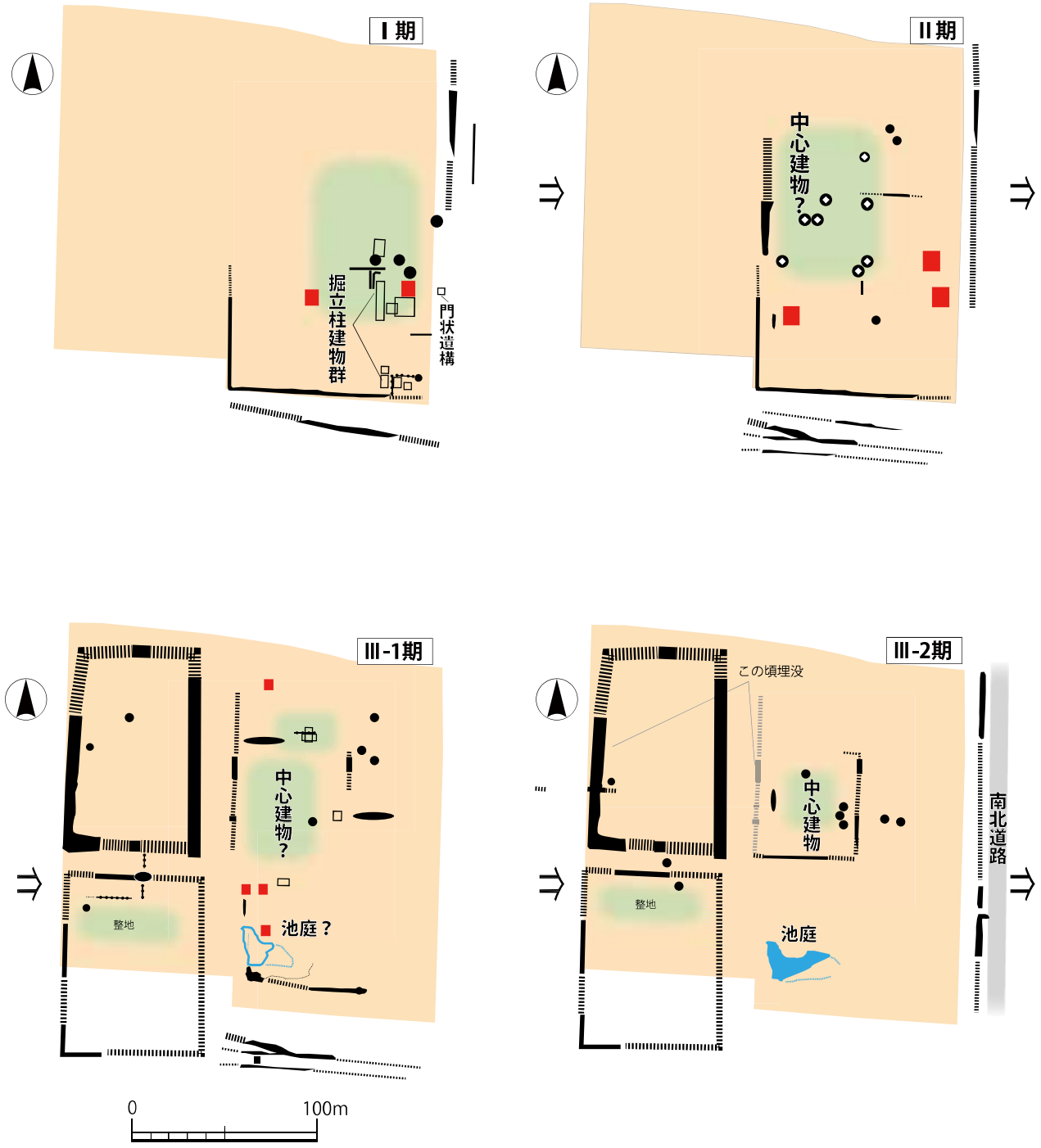


図 3-2　大友氏館跡変遷図①

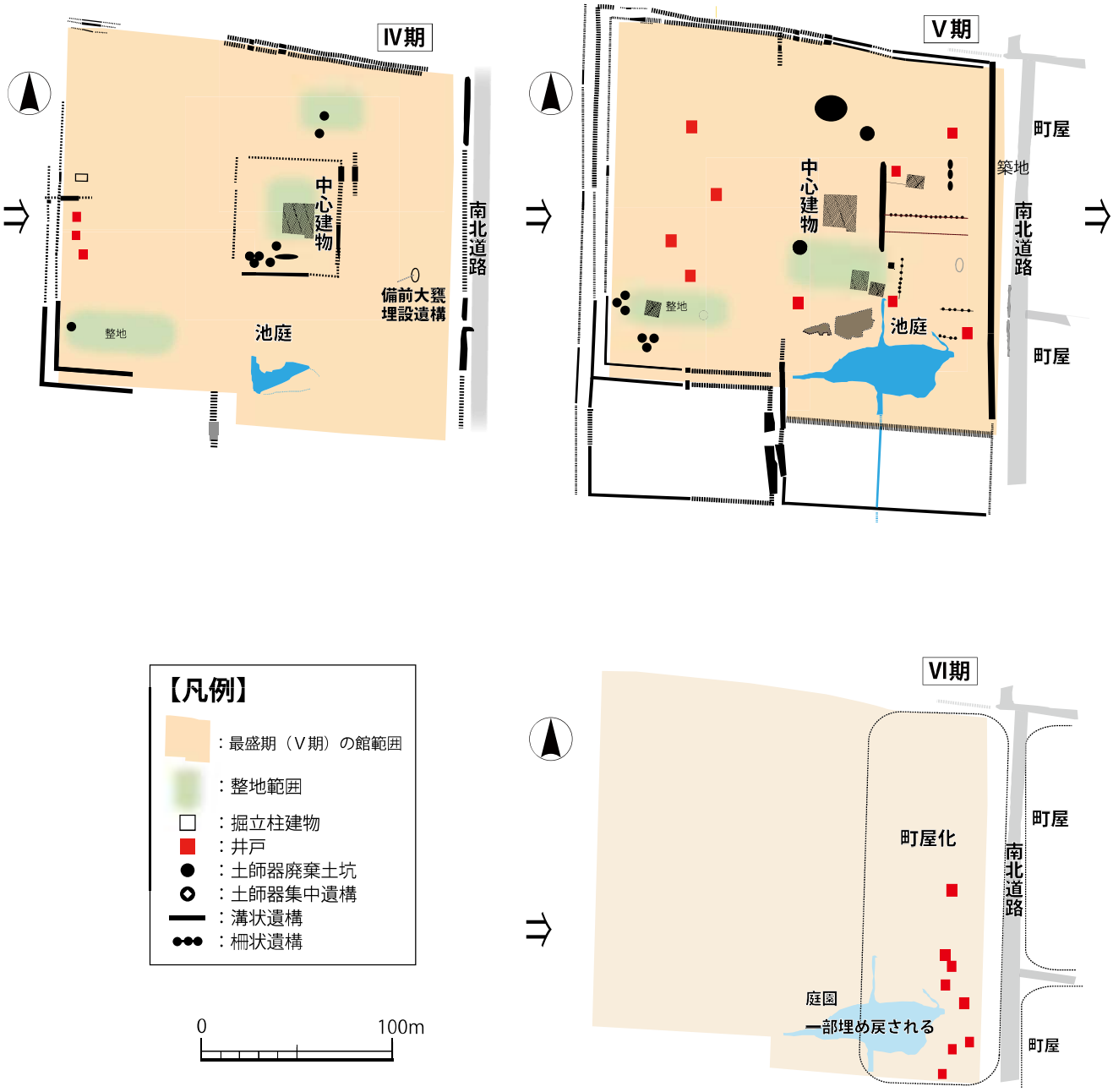


図 3-3　大友氏館跡変遷図②

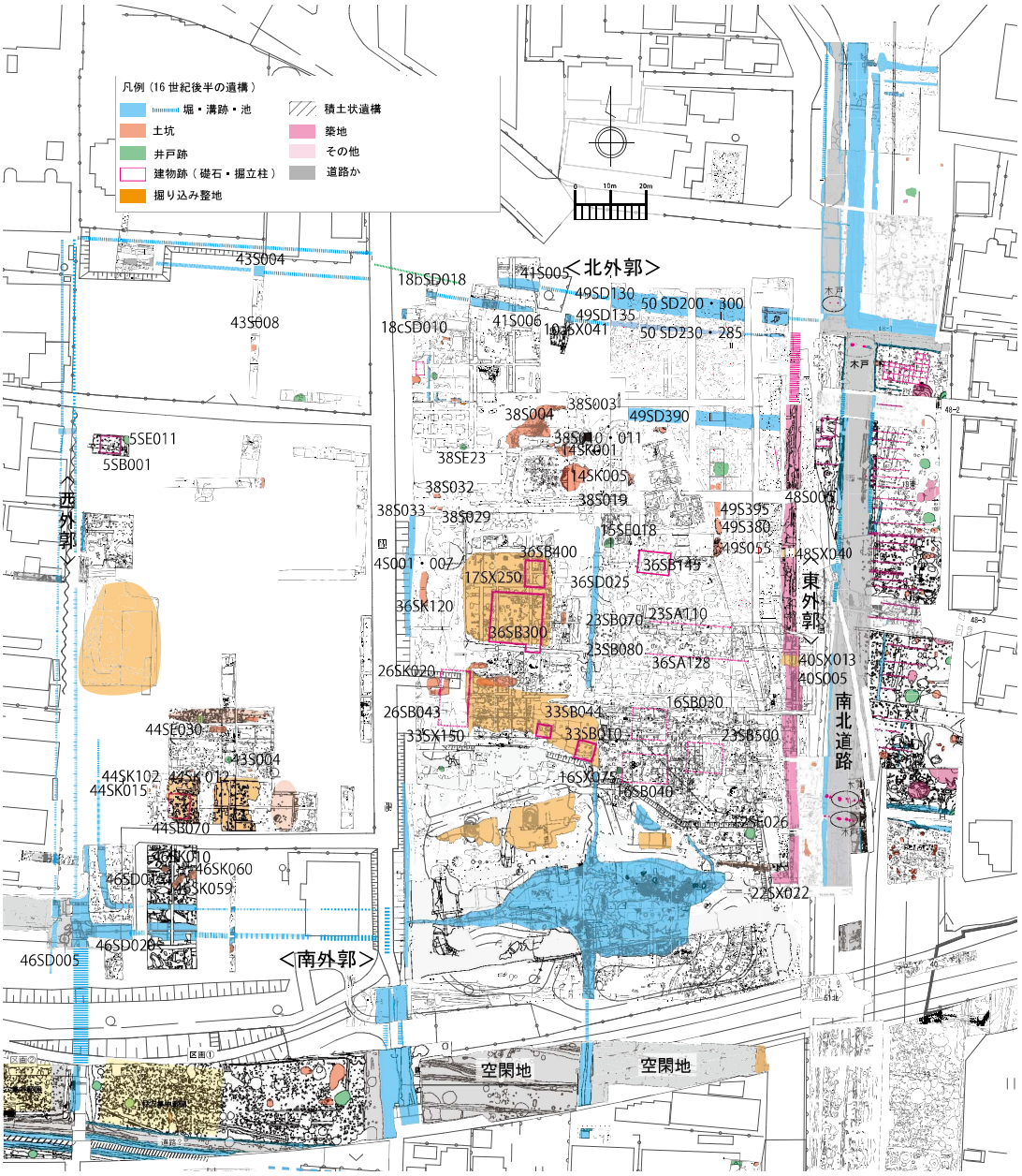
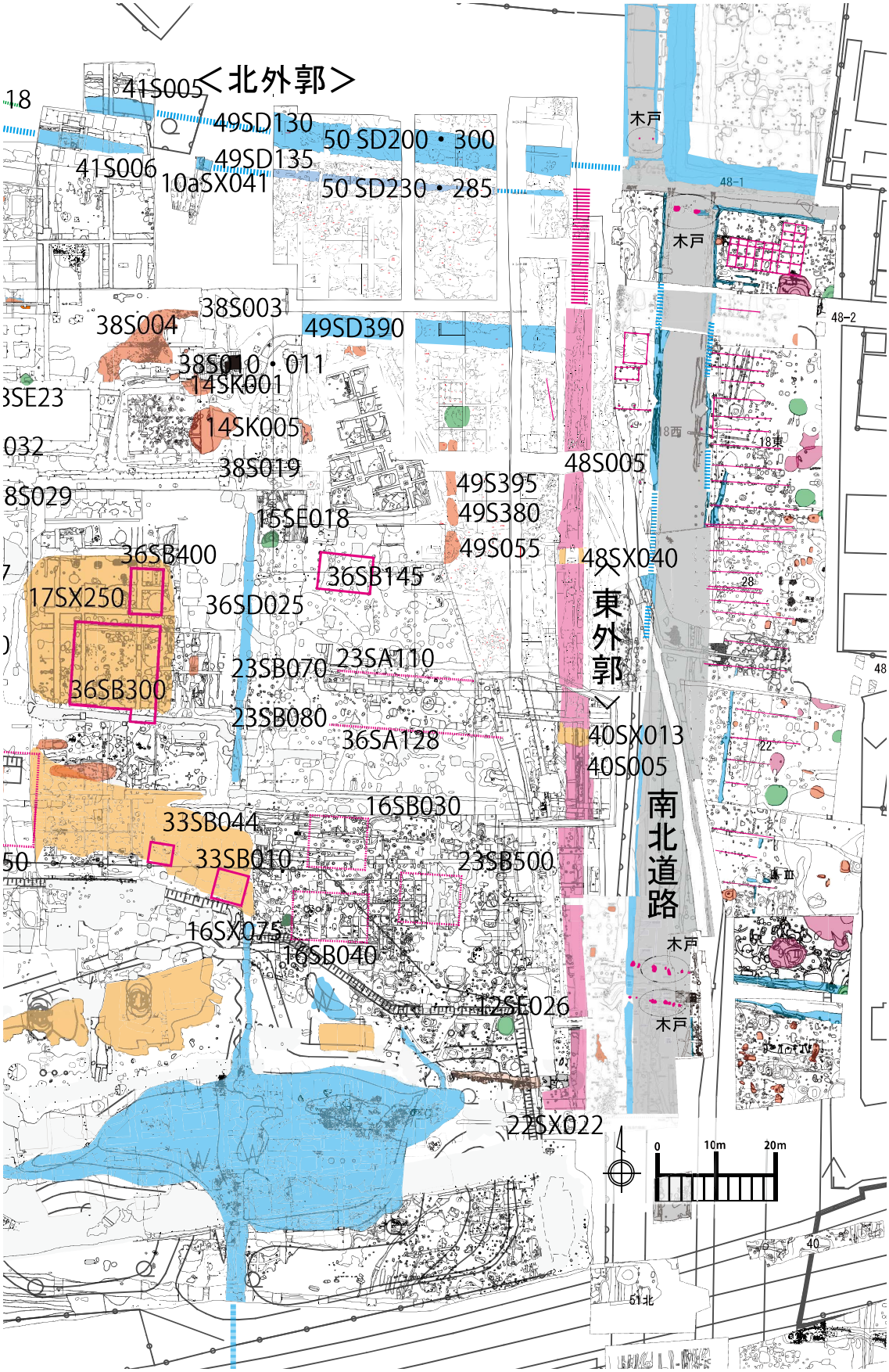


図 3-4　大友氏館跡【館Ⅴ期段階】遺構配置図

西半拡大図（図 3-4　大友氏館跡【館Ⅴ期段階】遺構配置図）



東半拡大図（図 3-4　大友氏館跡【館Ⅴ期段階】遺構配置図）

表 3-9　館 36SB300 概要表

遺構名	36SB300		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 5.14m	当時の推定レベル	標高 5.2m（礎石上で 5.4m）	
遺構の時期	館Ｖ期：16 世紀後半	主軸方位	Ｎ－４°－E	
遺構の規模	東西：東から 6 尺 5 寸の 1 間、2 間半、2 間、2 間の 7 間半。 南北：南から 6 尺 5 寸の 1 間、2 間半、2 間、2 間の 7 間半。 南東箇所に 2 間 ×2 間の出が確認される。			
内　　容	・礎石は一部検出されるが、ほとんどは礎石を安定させるための根石を確認。 ・当建物跡の北東 20mの箇所にある同時期の井戸跡から幅約 1mの安山岩の自然石を使用した礎石が出土しており、礎石規模から 36SB300 や 36SB400 に使用されたと考えられる。 ・当建物跡は遺構状況やその規模、検出レベルからすると『當家年中作法日記』に記載されている「大おもて」と考えられ、「御前」や「次の間」の記述がある。 ・建物周囲に 4 ～ 5 尺程度の縁が付くと考えられる。 ・規模から推定する部屋列は東西方向に 3 列構成となる。			

表 3-10　館 36SB400 概要表

遺構名	36SB400		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 5.14m	当時の推定レベル	標高 5.2m（礎石上で 5.4m）	
遺構の時期	館Ｖ期：16 世紀後半	主軸方位	Ｎ－４°－E	
遺構の規模	東西：東から 6 尺 5 寸の 1 間半、 1 間半の 3 間。 南北：南から 6 尺 5 寸の 2 間、2 間の 4 間。			
内　　容	・礎石は検出されておらず、礎石を安定させるための根石を確認。 ・36SB300 と同じく、付近の井戸跡から出土した礎石が当建物跡に使用されていた可能性が考えられる。 ・建物周囲には幅 4 ～ 5 尺程度の縁が付くと考えられる。 ・36SB300 に隣接することから、「大おもて」に付随した重要な機能が考えられる。			

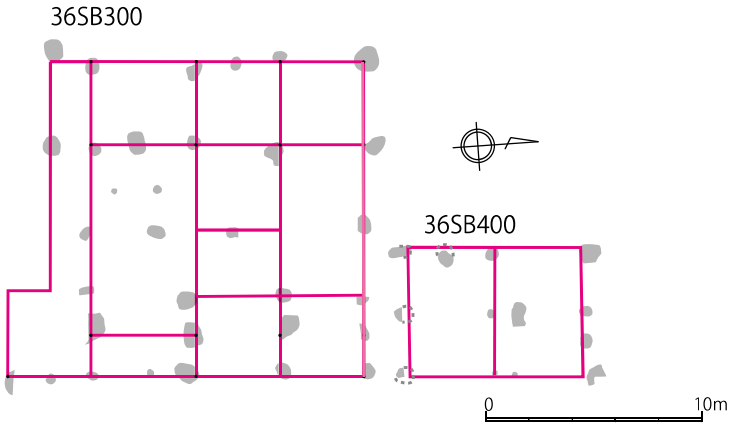
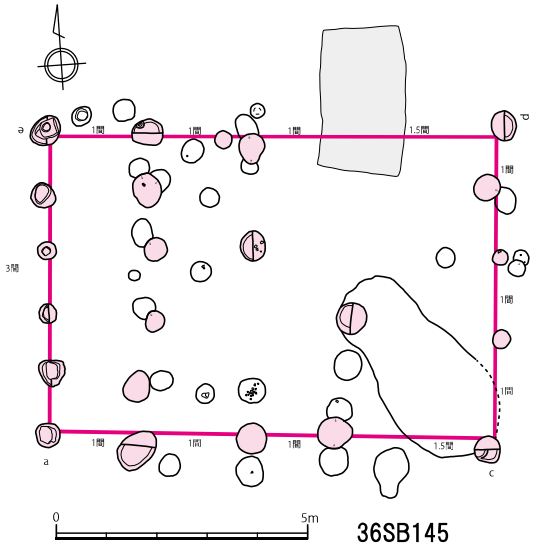


表 3-11　36SB145 概要表

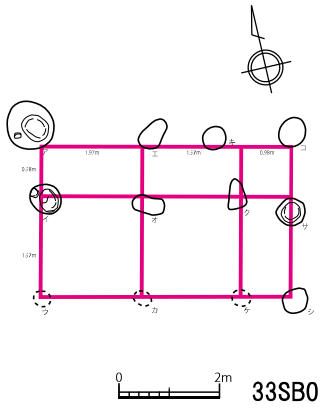
遺構名	36SB145		エリア	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.6m 残存する礎石の上面標高 4.65m	当時の推定レベル	標高約 4.6m（礎石上で 4.65m）	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀後半	主軸方位	N - 4°　- E	
遺構の規模	東西：東から 6 尺 5 寸の 1 間半、1 間、1 間　1 間の 4 間半。 南北：礎石が良好に残存する西辺で、南から幅約 4 尺の等間隔に礎石が 6 つ並ぶ 5 間となる。			
内　　容	・礎石は南北の西側列で検出されたが、その他は礎石が抜き取られ、掘り方のみ確認した。なお、建物跡内の北東側は近世以後の削平で周辺よりやや深いところに検出面があるため、掘り方の残存状況もよくない。 ・この建物跡に接するように、西側南北列を北側直線上に礎石状の石を含む遺構が並び、その 4 尺東にも平行するように丸礫を含む遺構が並ぶ。さらに西側南北列南から 2 つ目の礎石から西側に向かって、間隔は一定ではないが、東西直線上に礎石状の石が確認される。これらは当建物に付く渡廊や塀などの施設と考えられる。 ・当建物は中心建物跡の東側にあたり、また周辺に建物等は隣接していない。性格は不明であるが、『當家年中作法日記』に記述されている「遠侍」や「記録所」等の施設が想定される。			

表 3-12　33SB010 概要表

遺構名	33SB010		エリア	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.8m 残存する礎石の上面標高 4.95m	当時の推定レベル	標高 4.8m（礎石上で 4.95m）	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀後半	主軸方位	N - 12°　- E	
遺構の規模	東西：東から 6 尺 5 寸の 1 間、2 間の 3 間、もしくは 1 間半、1 間半の 3 間。 南北：南から 6 尺 5 寸の 2 間、2 間の 4 間。			
内　　容	・礎石は西側南北列で 2 ヵ所、東側南北列で 1 ヵ所検出。そのほかは、礎石はなくなっていたが、掘り方を検出。また建物跡の南側東西列の西の 3 つは、近世の削平を受けており、掘り方も検出されなかったが、南東側に 1 基残存しているため、ここを最南側東西列と判断した。 ・建物の性格は不明であるが、西側の 33SB044 に近く、また園池の北溝の北側に近接するため、これら施設との関連が考えられる。			



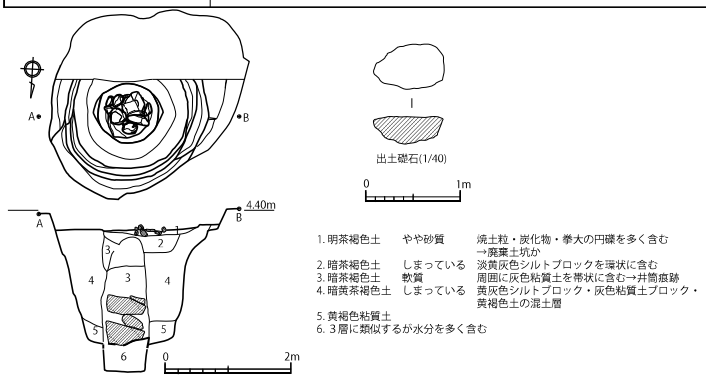
36SB145



33SB010

表 3-15　15SE018 概要表

遺構名	15SE018		
遺跡検出レベル	検出標高 4.4m	当時の推定レベル	標高約 4.7m
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀後半	主軸方位	―
遺構の規模	平面プラン：円形 規模　　：掘り方直径約 3.4m、井筒直径約 0.7m、底部標高 1.9m		
内　　容	・井筒部下層より、礎石が 3 石出土しており、中心建物との関連が推定される。		

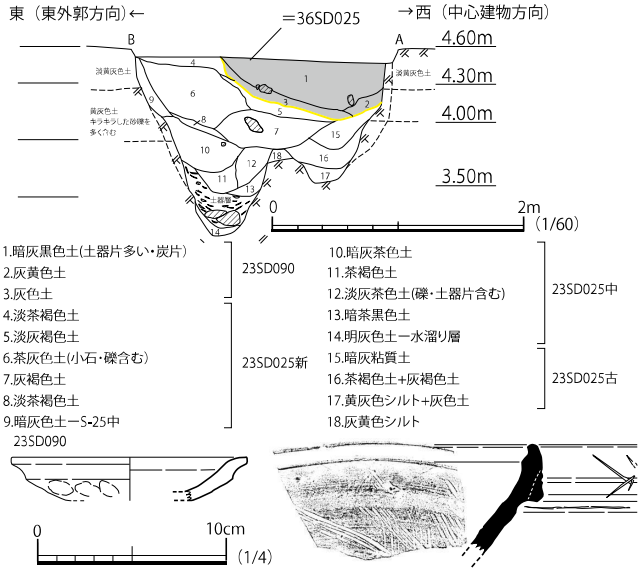


15SE018遺構(1/120)及び出土礎石(1/80)

15SE018（北から）

表 3-16　36SD025 概要表

遺構名	36SD025（23SD090）		
遺跡検出レベル	検出標高 4.7m	当時の推定レベル	溝の東側：標高 4.7m 溝の西側：標高 5.0m
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀後半	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	全長約 45.5m　最大幅約 0.8m、最大深度約 0.5m		
内　　容	・中心建物と東側の空間を区画する溝である。 ・周辺の復元標高から、溝の西側の復元標高は高く、東側は低い。溝を境に段差が付く。 ・溝の掘り方西側ラインに平行して、23SA070・080 の柱穴が確認されており、その直線延長上には確認されないため、根太構造の塀などの遮蔽物が展開した可能性がある。		



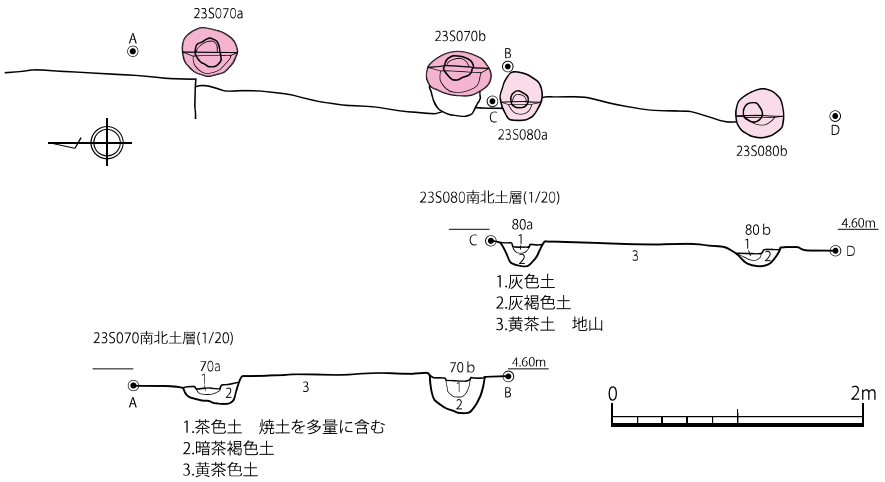
36SD025（北西から）

表 3-13　23SA070 概要表

遺構名	23SA070		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.5m	当時の推定レベル	標高約 4.7m	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀（重複関係より）	主軸方位	N−4°−E	
遺構の規模	柱穴 a：径約 0.4m× 深度約 0.2m　底面標高 4.40m 柱穴 b：径約 0.5m× 深度約 0.3m　底面標高 4.30m			
内　　容	・柱穴間隔は 1.97m(6 尺 5 寸)。柱穴内には大量の焼土が含まれる。 ・東側に近接する 36SD025 と平行する。 ・柱穴 2 基 1 対の門などの施設と考えられる。 ・柱穴の南北方向の延長線上には連続する柱穴は検出できなかったが、南北溝西側ラインに平行するように、土台式の塀等が柱穴列から連続して南北に伸びていたと考えられる。 ・23SA080 も類似遺構であるが、36SD025 が掘り返しなどで複数時期あることから、23SA070、080 は同時存在ではなく時期差があると思われる。			

表 3-13　23SA080 概要表

遺構名	23SA080		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.5m	当時の推定レベル	標高約 4.7m	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀（重複関係より）	主軸方位	N−4°−E	
遺構の規模	柱穴径約 0.4m　底面標高 4.30m			
内　　容	・柱穴間隔は 1.97m(6 尺 5 寸)。 ・東側に近接する 36SD025 と平行する。 ・柱穴 2 基 1 対の門の施設と考えられる。 ・柱穴の南北方向の延長線上には連続する柱穴は検出できなかったが、南北溝西側ラインに平行するように、土台式の塀等が中門から連続して南北に伸びていたことも考えられる。 ・23SA070 も近接して見つかった類似遺構であるが、36SD025 が掘り返しなどで複数時期あることから、23SA070、080 は同時存在ではなく、時期差があると思われる。			



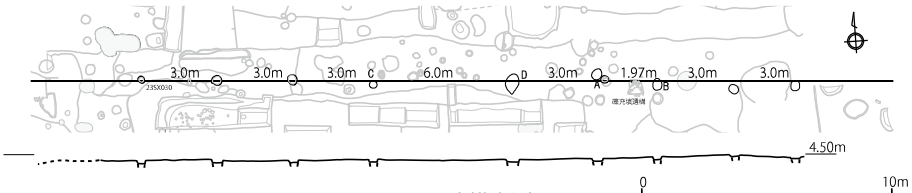
23SA070 及び 23SA080 実測図

表 3-17　23SA110 概要表

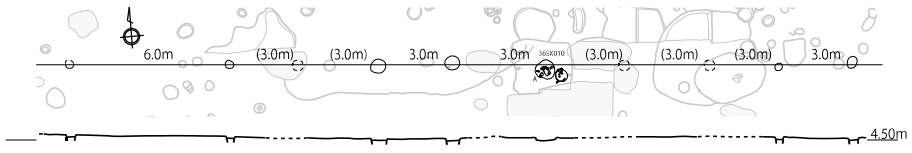
遺構名	23SA110		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.5m	当時の推定レベル	標高約 4.6m	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀（重複関係より）	主軸方位	E-4°-S	
遺構の規模	ピット 9 基：西より約 3m(10 尺）間隔で配置。ただし、西から 4 つ目と 5 つ目の間隔は 6mとなり、6 つ目と 7 つ目の間隔は 1.97m（6 尺 5 寸）となる。			
内　　容	・柱穴間隔は 10 尺を基本とする。 ・1.97m(6 尺 5 寸）間隔の箇所は、出入り口の可能性あり。 ・柱穴は塀の本体の主柱である可能性と塀を支えるための控え柱の可能性あり。 ・南約 9.5mの 36SA128 の塀と平行であり、同時存在した可能性あり。 ・西側の端は不明であるが、他の遺構との関係から 36SD025 の東端付近で止まる可能性あり。東端は不明。 ・この塀の北側では黒・灰色の砂利が敷かれた痕跡が確認される。また南側は近世以後の削平により残存状況はよくないが、16 世紀末以降の遺構からは白色の玉砂利が多く出土している。			

表 3-18　36SA128 概要表

遺構名	36SA128		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.6m	当時の推定レベル	標高約 4.7m	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀（重複関係より）	主軸方位	E-4°-S	
遺構の規模	東西：東から 6 尺 5 寸の 1 間、2 間の 3 間、もしくは 1 間半、1 間半の 3 間。 南北：南から 6 尺 5 寸の 2 間、2 間の 4 間。			
内　　容	・柱穴間隔は 10 尺を基本とする。 ・柱穴は塀の本体の主柱である可能性と塀を支えるための控え柱の可能性あり。 ・人頭大の円礫を含む遺構は、塀構造と一体となった出入り口などの可能性あり。 ・北約 9.5mにある 23SA110 と平行であり、同時存在した可能性あり。 ・西側の端は不明であるが、他の遺構との関係から 36SD025 の東端付近で止まる可能性あり。東端は不明。 ・この塀の南側では黒・灰色の砂利が敷かれた痕跡が確認される。また北側は近世以後の削平等により残存状況はよくないが、16 世紀末以降の遺構から白色の玉砂利が多く出土している。			



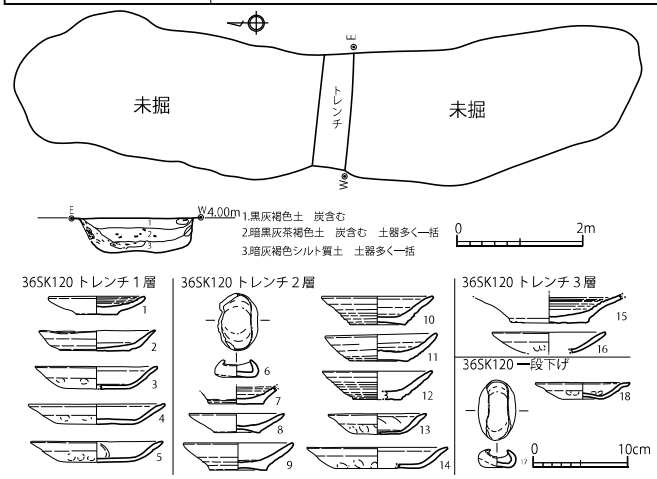
23SA110 遺構実測図 (1/300)



36SA128遺構実測図(1/300)

表 3-19　36SK120 概要表

遺構名	36SK120		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.0m	当時の推定レベル	標高約 5.0m	
遺構の時期	館Ⅳ～Ⅴ期：16 世紀中葉～後半	主軸方位	―	
遺構の規模	南北に伸びる長土坑で、南北 10m、東西 1.8m、最深部標高 3.45mである。			
内　　容	・土器の大量廃棄土坑は、京都系土師器主体の土坑に限っても、中心建物域から多く検出される。 ・当遺構は中心建物跡の西側で検出され、中心建物側から廃棄された状況が考えられる。 ・このような土坑のあり方は、中心建物で行われた饗宴などで使用された土器を一括廃棄したものと考えられる。 ・中心建物跡北側の類似遺構の土壌を自然科学分析を行うと、魚の歯（タイ科）や二枚貝などが検出され、当時の献立を考える上でも重要である。			

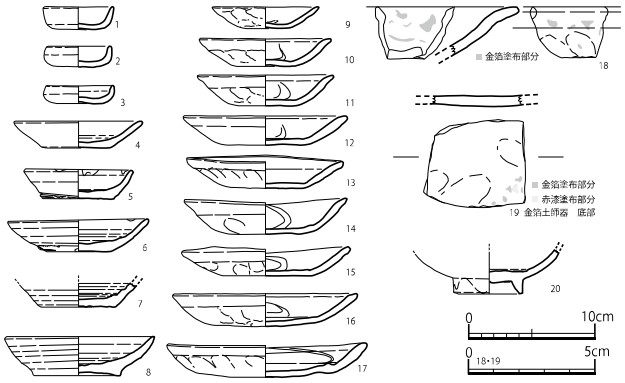


36SK120 遺構 (1/120) 及び出土遺物 (1/8) 実測図

36SK120土層断面

表 3-20　26SK011 概要表

遺構名	26SK011		地区	中心建物域
遺跡検出レベル	検出標高 4.1m	当時の推定レベル	標高約 5.0m	
遺構の時期	館Ⅳ～Ⅴ期：16 世紀後半	主軸方位	―	
遺構の規模	土坑は不定形状で、南北 4.6m、東西 1.8 ～ 3mである。			
内　　容	・土坑内からは、大量の京都系土師器のなかに金箔貼りのものが 2 破片含まれていた。 ・26SK011 は中心建物跡の南西側の近接した場所で検出され、中心建物と関連すると推定される。 ・このような土坑のあり方は、中心建物で行われた饗宴などで使用された土器を一括廃棄したものと考えられる。			



26SK011出土遺物 (1/3・1/6) 実測図

26SK011遺物出土状況

表 3-21　北外郭関連遺構概要表

<table>
<tr><td>遺構名</td><td colspan="2">館 7SD041・006、館 9SD004（館 10ASD041~044）、
館 18SD020・SD018、館 41SD005・006</td><td>地区</td><td>北外郭域</td></tr>
<tr><td>遺跡検出レベル</td><td>館 7 次　：3.65~3.3m
館 9・10 次：3.9m
館 18 次：3.9m
館 50 次：4.1m</td><td>当時の推定標高</td><td colspan="2">標高約　4.2　m</td></tr>
<tr><td>遺構の時期</td><td>館Ⅴ期：16 世紀後半</td><td>主軸方位</td><td colspan="2">館 7 次：E-3°-S
館 18・41 次：E-10°-S</td></tr>
<tr><td rowspan="4">遺構規模</td><td colspan="4">館 7SD041（外溝）検出幅：約 1.0m、最大深度 0.4m、溝底標高：不明（削平）、
館 7SD006（内溝）検出幅：約 1.5m、最大深度 0.6m、溝底標高：2.4m、断面逆台形</td></tr>
<tr><td colspan="4">館 10ASD041　検出幅：2.0m、最大深度：1.4m、溝底標高：2.55m、断面 V 字状
【掘り直し後】最大深度：0.8m、溝底標高：3.05m</td></tr>
<tr><td colspan="4">館 18SD015（内溝）検出幅：2.25m、最大深度：1.1m、溝底標高：2.9m、断面 V 字状
館 18SD018（内溝 / 掘り直し後）検出幅：1.7m、最大深度：0.8m、溝底標高：3.2m
断面Ⅴ字形
館 18SD20（内溝）検出幅：1.7m、最大深度：1.1m、溝底標高：2.9m、断面逆台形</td></tr>
<tr><td colspan="4">館 41SD005（外溝）検出幅：2.4m＋α、最大深度：1.5m、溝底標高：2.4m、
断面緩やかな逆台形
館 41SD006（内溝）検出幅：2.3m＋α、最大深度：0.9m、溝底標高：3.0m、
断面緩やかなⅤ字状</td></tr>
<tr><td>内　　容</td><td colspan="4">・館 7・41・50 次調査では、2 条の溝跡とその間に幅約 4.5mの空閑が、館 18・41 次調査では 2 条のうちの内溝と積み土状の痕跡が確認されている。また内溝からは壁土も出土している。このことから、2 つの溝に挟まれる 4.5mの空閑地内には積み土及び土塀等の立体構造物が推定される。
・館 7・18・41 次では、砂質土・シルト質土が 5~10 ㎝単位で互層状堆積が認められる。
※館 7 次の積み土状遺構は、遺構との新旧関係上、館Ⅴ期以前のものである。
・溝跡からは、拳大 ~ 人頭大の礫や瓦破片が出土している。
・外溝・内溝共に、溝底面に粘土を張り付ける。
・外溝・内溝は土層堆積状況より、部分的に掘り直しが確認される。</td></tr>
</table>

表 3-22　西外郭関連遺構概要表

遺構名	館 46SD015（070）、020（050） 町 66SD001・020、町 118		地区	西外郭・西建物域
遺跡検出レベル	検出標高　町 118 次 3.8m 町 66 次　3.9m 館 46 次　3.9~4.0m	当時の推定レベル	標高約　4.3　m	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀中頃～後半	主軸方位	N-0°-E	
遺構の規模	館 46SD020・050　検出幅：4.5m、最大深度：1.5m、底面標高：2.4m、断面逆台形 【掘り直し後】検出幅：1.2m＋α、深度：約 0.7m（溝底標高 3.0m） 館 46SD015・070　検出幅：2.0m、最大深度：1.1m、底面標高 2.8m、断面不定形な逆台形 【掘り直し後】深度：約 0.7m（溝底標高 3.0m） 町 66SD020　検出幅：0.5m、最大深度：0.4＋αm、 底面標高：不明、断面逆台形 町 118SD　　検出幅：2.2m＋α、最大深度：約 1.1m、底面標高：2.6m 【掘り直し後】 検出幅：約 1.5m、最大深度：約 0.8m、底面標高 3.0m			
内　　容	・3 地点で、西外郭と考えられる南北溝が確認される。そのうち、館の南西部に位置する館 46 次では 2 条の南北溝が確認され、間には 2~4mの空閑地が存在する。 ・各地点の土層堆積状況より、2~3 回の掘り直し痕跡が確認される。 ・内溝からは壁土が出土する。 ・溝跡に伴う積み土痕跡は確認されていない。 ・館 46SD050 は外溝に該当し、構築時溝底に 0~15 ㎝程の厚さで粘土を張る。南西部でＬ字状に屈曲する。検出標高は 3.9~4.0m。 ・館 46SD070 は内溝に該当し、SD050 同様南西部でＬ字状に屈曲する。 ・町 66 次調査では、溝が途切れる箇所が確認されている。			

表 3-23　南外郭関連遺構概要表

遺構名	館 46SD020・050、町 63Ａ区 SD001・080		地区	南外郭・西建物域
遺跡検出レベル	検出標高 館 46 次　3.9~4.0m 町 63 次　4.1m（内溝） 4.0m（外溝）	当時の推定レベル	標高約　4.3　m	
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀（重複関係より）	主軸方位	E-3°-S	
遺構の規模	館 46SD020（外溝）　検出幅：約 5.0m、最大深度：約 1.5m、溝底標高：2.4m　断面逆台形 【掘り直し後】 検出幅：約 1.2m、深度：約 0.7m、溝底標高：3.0m 館 46SD015（内溝）　検出幅：約 2.0m、最大深度：約 1.1m、溝底標高：2.8m　断面不定形な逆台形 町 63ASD080（外溝）検出幅：最大約 3.0m＋α、最大深度：約 1.7m　溝底標高：2.3m 断面不定形な逆台形 【掘り直し後】 検出幅：約 1.5m、深度：約 1.05m→1.0m→0.7m、溝底標高：2.3m→2.85m→3.2m 町 63ASD001（内溝）検出幅：約 1.55m、最大深度：約 0.7m、溝底標高：3.7m　断面逆台形			
内　　容	・館 46 次・町 63 次Ａ区において、2 条の東西溝が確認された。外溝と内溝の間に約 4.0~6.0mの空閑地が存在する。 ・館 46SD020、015 から焼けた壁土が出土している。 ・内溝は土層堆積状況から 2 回の掘り直しが、外溝は 3~4 回の掘り直しが確認される。 ・館 46SD015、020 は館南西部に位置し、Ｌ字状に屈曲する。 ・外溝は他の外郭溝と比較し、規模が大きい。 ・外溝は溝底面に粘土を張り付ける。また、北方向から土が流入した痕跡が認められる。			

表 3-24　東外郭関連遺構概要表

<table>
<tr><td>遺構名</td><td colspan="3">館 28 次積み土状遺構、館 22SX022~024、館 40SX005・013
館 45SX040、館 48SX005・040</td><td>地区</td><td>東外郭域</td></tr>
<tr><td>遺跡検出レベル</td><td colspan="2">館 28 次：6.0m　館 22 次：5.1~4.6m
館 40 次：4.9m　館 45 次：4.8m
館 48 次：5.1m
※最も高い検出標高値</td><td>当時の推定標高</td><td colspan="2">標高約 5.0m(築地基部)</td></tr>
<tr><td>遺構の時期</td><td colspan="2">館Ⅴ期：16 世紀後半</td><td>主軸方位</td><td colspan="2">館 22・40・48 次：N−1°−W
館 45 次　　：N−3°−W</td></tr>
<tr><td rowspan="5">遺構種別</td><td>積み土状遺構</td><td colspan="4">館 28 次で、砂・粘質土・小石（砂利）を 4~5 ㎝厚で薄く突き固められた積み土が約 0.5mの厚さで検出された（検出標高 5.9~6.0m）。
積み土部と下位の層との境界部分の標高は 5.4m。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">基礎跡</td><td colspan="4">館 22SX022~024：東外郭想定部分において厚さ約 0.2mの掘り込み地業跡が確認された（検出標高 4.5m）。
調査区北壁において、厚さ約 0.1mの硬化した土層が検出された（検出標高 4.9m）</td></tr>
<tr><td colspan="4">館 40SX005・013：東外郭想定部において厚さ約 0.2mの硬化した砂質土の掘り込み地業跡が確認された（検出標高 4.8m）。また、築地の一部と考えられる堆積土が掘り込み地業によって、南北約 4.0m＋αで途切れる箇所が確認した。</td></tr>
<tr><td colspan="4">館 45SX040：外郭想定部分において厚さ約 0.1~0.2mの掘り込み地業跡が確認された（検出標高 5.0~4.8m）</td></tr>
<tr><td colspan="4">館 48SX005・SX040：SX005 は築地基部と考えられる。遺構の大部分は後世の削平を受け、上面は焼土で覆われる。埋土は粘土と砂混ざりで硬く締められている。残存状況から東西幅は最大で 4.5m＋α程と考えられる。SX040 は、第 48 次調査区の南側で確認された掘り込み整地跡と推定される遺構で、SX040 により築地基部が南北 2.6m程途切れる。東西幅は 4.1m＋αを測る。</td></tr>
<tr><td>内　　容</td><td colspan="5">・東外郭域での 5 地点の調査において、築地等の基部と推定される掘り込み整地が南北方向で帯状に約 116mの長さで確認されている。その途中、3 地点において別途掘り込み整地により途切れる部分が認められる。
・館 28 次の積み土状遺構は、構造や周辺の遺構の検出標高と比較すると築地等の立体構造物になる可能性が考えられる。
・館 22・40・45・48 次調査で確認された堆積土及び掘り込み地業跡は、築地等の外郭施設に伴う地業跡の推定される。
・館 40・48 次において、掘り込み地業により外郭基部が途切れる地点は、外郭施設の開口部と考えられる。</td></tr>
</table>

表 3-25　館Ⅴ期（相当含む）遺構一覧表①

整備ゾーニング	検出遺構（遺構番号）	遺構種別	検出規模	検出標高（m）＊最高値	底面標高（m）	遺構概要等
中心建物域	36SB300 36SB400	礎石建物跡	SB300（東西 7 間半×南北 7 間半） SB400（東西 3 間×南北 4 間）	5.14	-	掘り込み整地 17SX250 に伴う礎石建物跡で、大友館の主殿である「大表」に該当すると考えられる。礎石の大部分は、近世以降に礎石を抜き取ったと思われる痕跡が分布・配列する。 ※詳細は表 3-9・10 を参照。
	36SB145	礎石建物跡	礎石が残存する箇所の南北列で 1 間 6 尺 5 寸の 3 間、東西は 4.5 間	4.60	-	西辺に南北列のみで礎石を検出した。礎石が残存する列の検出標高が他の箇所より高く、それ以外の箇所は、後世の削平により礎石が滅せられたと考えられる。 ※詳細は表 3-11 を参照。
	33SB010	礎石建物跡	東西 5 m×南北 3 m	4.90	-	掘り込み整地遺構 33SX150 上で検出された礎石建物跡と推定され、近世以降の耕地化により一部の礎石は除かれている。 ※詳細は表 3-12 を参照。
	33SB044	礎石建物跡	2 間× 2 間（3.94 m× 3.94 m）	5.00	-	掘り込み整地遺構 33SX150 上で検出された礎石建物跡の可能性が考えられるが、礎石及び掘り方は近世以降の耕地化により削平をうける。
	26SB043	礎石建物跡	礎石 2 基残存	5.00	-	掘り込み整地遺構 33SX150 の上面に礎石が確認された礎石建物跡である。SP043 の東側には対応する礎石及び礎石痕は認められない。西側は近世水田により削平を受けており、この残存した礎石は建物の東辺と考えられる。この建物跡の西側は同時代のかわらけ廃棄土坑があるため、ここが西の限りであろう。また南北は掘り込み整地内に収まると考えられる。したがって、この礎石建物跡の規模は最大で、南北 18 m、東西 7 mとなる。
	16SA030	礎石建物跡	礎石列確認。 南北方向に 9 間（約 21 m） 主軸方位はＮ -4° -E	4.85	-	礎石列のうち標高が最も高いものは 4.87 mである。南北方向に同軸線上に並んでおり、館 16 次の近世以降の耕地化による削平をうけていないところまで約 21 mにわたって確認される。分布としては大きく 3 つのまとまりがある。礎石間距離は概ね 1.97 mの 1 間だが、北側（の礎石群（5 基）と中間地点の礎石群（3 基）の間は約 4 m、中間地点と南側の礎石群（2 基）の間は約 3.3 mとなっている。周辺の軸線が類似する遺構群との関係性から時期を検討すると 16 世紀中葉～後葉となる。またその礎石列周辺には礎石抜き取り痕や 34SE001 の井筒部に大量の人頭大の礎石が出土していることから、複数棟の礎石建物が推定される。
	23SA110	柱穴列	東西長約 26 m分検出 ピット間 10 尺、一部 7 尺距離あり	4.50	-	主軸方位は N-4° -E をとり、現状 9 基のピットから構成される。 ※詳細は表 3-17 を参照。
	36SA128	柱穴列	東西長約 31 m分検出 ピット間 10 尺、一部 6 尺 5 寸と 8 尺箇所あり	4.60	-	主軸方位は N-4° -E をとり、現状 8 基のピットから構成される。柱穴径は約 0.3 mが主となる。 ※詳細は表 3-18 を参照。
	23SA070	柱穴列	柱穴 a 径約 0.4 m×深度約 0.2 m 柱穴 b 径約 0.5 m×深度約 0.3 m ピット間 6 尺 5 寸	4.60	4.40 4.30	2 基 1 対の柱穴列で、ともに柱痕が残り焼土（焼けた壁土）で埋められる。 主軸方位は N-4° -E をとり、36SD025 に平行して検出される。時期を確定できる遺物は出土しておらず、上記溝との軸線が類似することから 16 世紀後葉～末頃と判断している。 ※詳細は表 3-15 を参照。
	23SA080	柱穴列	柱穴径約 0.4 m ピット間 6 尺 5 寸	4.50	4.30	2 基 1 対の柱穴列で、ともに柱痕が残る。 主軸方位は N-4° -E をとり、36SD025 に平行して検出される。時期を確定できる遺物は出土しておらず、上記溝との軸線が類似することから 16 世紀後葉～末頃と判断している。 ※詳細は表 3-16 を参照。
	17SX250	整地跡	【最上位の掘り込み整地の規模】東西約 23 m＋α×南北約 26 m、底標高 4.4 m	5.20	4.10	館の中心施設が立地する地点で確認される整地遺構である。上位の砂質土と最下層の砂利層は中心建物跡 36SB300・400 に伴う掘り込み整地で、東西約 23 m以上 (西側は近世水田により削平される)、南北約 26 mにわたり広がる。砂利層は地盤強化を目的としたと考えられる。
	33SX150	掘り込み整地	東西約 30 m＋α×南北約 10 m＋α、底標高 4.4 m	5.00	4.70	17SX250 と約 12 ～ 13 mの間隔を空けて南側で検出される、北西から南東へとやや傾斜気味に帯状に広がる掘り込整地跡である。延伸する方向が館内の施設と一致しないことから不可解ではある。規模については、館 33 次園池方面・館 26 次地点方向にかけて近世以降の耕地化による削平のため不明となる。 33SX150 上に、33SB010 や礎石痕と推測されるピットが形成される。
	38SX003 （24SX010）	掘り込み整地	東西約 8 m＋α×南北約 9 m＋α×深度（西側）約 0.55 m、（北東側）約 0.4 m	4.20	3.55	硬く締まった砂と土とを互層に整地した痕跡が確認できる。これは建物に伴う掘り込み整地と考えられ、互層にした掘り込み整地は現状で他では確認できない。

表 3-26　館Ⅴ期（相当含む）遺構一覧表②

整備ゾーニング	検出遺構（遺構番号）	遺構種別	検出規模	検出標高（m）＊最高値	底面標高（m）	遺構概要等
中心建物域	36SD025	溝跡	全長約 45.5 mの南北溝 最大幅約 0.8 m×最大深度約 0.5 m	4.70	4.30～4.00	中心建物跡と東側を区画する溝跡であり、主軸方位はN-4°-Eを取る。同一地点で大きく 3 回程度溝が掘り直されており、36SD025 は最終段階と位置付けられる。出土遺物から 16 世紀後葉～末葉頃と考えられる。下位の溝は 15SD025 上層・下層として区分している。下層出土の京都系土師器皿の年代観から館Ⅴ期段階から溝は機能していた可能性がある。 ※詳細は表 3-14 を参照。
	15SE018	井戸跡	長軸 3.4 m×短軸約 2.6 m×最大深度 2.5 m 素掘り状	4.40	1.90	平面プランはやや不整形な楕円形状を呈す。最下層は砂層まで達しており、標高 2 m前後で湧水していたと考えられる。井筒部からは礎石に使用されていた石が 3 点井戸封じに使用されたのか、出土している。礎石の一つにはアタリ痕が見られ、7㎝各の角柱が据えられていたことが窺える。 ※詳細は表 3-13 を参照。
	38SE023	井戸跡	14.5m ＋α× 2.2m × 1.2m ＋α 素掘り状	4.00	不明（未掘削）	平面プランは不整形を呈す。井筒部と思われる堆積を土層で確認しているが、下位までは未掘削のため、井戸枠等の状況は不明である。出土遺物は、坏 Bn Ⅳや薄手の京都系土師器が出土しており、16 世紀前半から中頃に機能もしくは廃絶したものと考えられる。
	21SX220	埋甕遺構	東西 1.6 m×南北 2.7 m×最大深度 1.0 m 【掘り方形状】南北に長いやや不整形な長方形	4.78	3.80	掘り方内に 3 箇所の掘り込みがあり、2 箇所には備前焼の甕（中世 6a 期）が埋められた状態で出土した。 その他鉄製品札板や裏込め土から京都系土師器皿・青花碗が見られる。トイレ遺構の可能性もあるが、科学分析を行ったところ、トイレ遺構か否かの判断はできていない。
	14SK001	廃棄土坑	東西 2 m＋α×南北 1.4 m＋α×深度 0.7 m	4.40	3.70	当該地点に広がる土師器廃棄土坑群に該当し、完形率の高い京都系土師器皿が折り重なるように多量に出土した。14SK001 は幾つかのブロックにまとまっており、14SK001 ①は、大きく 3 層の土師器廃棄層が確認でき、埋土内のものは完存品に近いかたちで廃棄される。
	38SK004	土坑	19 m＋α× 6.8 m＋α× 0.3 m＋α	4.05	不明（未掘削）	不整形を呈する掘方であるが、西側は上位の包含層に覆われていると思われるため、正確な平面プランは判然としない。京都系土師器を中心とする遺物が極めて多数出土しているため、土師器の廃棄土坑と思われるが、部分的に表面を掘り下げたのみであるため、堆積状況は不明である。土師器の広がり方から複数回の廃棄が行われた可能性はあるが、不明である。遺物に京都系土師器のほか、近世Ⅰ期の備前焼擂鉢を含む。
	38SK010・011	土坑	1.7 m× 1.1 m× 0.2 m	4.00	3.80	平面プランは不整楕円形を呈する。京都系土師器を多く含む廃棄土坑で、当初 SK010 と SK011 を別遺構と捉えていたが、掘削の結果、埋土の差であり、同一の遺構と判断した。京都系土師器は、口縁端部 a･d 類が多く、e･f 類が混じる。遺物の様相から 16 世紀中頃から後半に埋没したと考えられる。
	38SK019	土坑	1.1 m× 1.0 m× 0.25 m＋α	4.35	不明（未掘削）	平面プランが円形を呈すると思われる、土坑状の遺構であるが、京都系土師器が 3 点ほどまとまって出土した地点の周囲を遺構と考えたもので、正確な平面プランは確認できておらず、掘削していないため、掘方の正確な形状は不明である。一部攪乱に削平された部分で、0.25 m以上の深度を測るが、それ以上掘削していないため、最終的な深度は不明である。また、土層を確認しておらず、堆積状況は不明である。
	38SK032	土坑	2.4 m＋α× 1.3 m＋α× 0.2 m	4.15	3.95	平面プランは不整形を呈するが、南側を攪乱に削平される。京都系土師器が多く集中しており、土師器の廃棄土坑と考えられる。
	38SK033	土坑	1.5 m× 0.8 m＋α× 0.1 m	4.15	4.05	平面プランは楕円形を呈するが、北側を攪乱に削平される。京都系土師器が少量出土している。出土遺物は少ないが、形状から廃棄土坑の可能性がある。
	38SK029	土坑	1.5 m× 1.0 m＋α× 0.2 m	4.15	3.95	平面プランは楕円形を呈するが、北側を攪乱に削平される。京都系土師器の破片が出土している。出土遺物は少ないが、形状から廃棄土坑の可能性がある。
	36SK120	土坑	南北 10 m×東西 1.8 m×最大深度 0.55	4.00	3.45	南北に長い丸みをもった不定形な隅丸長方形を呈す。埋土中から多くの土師器が出土しており、京都系土師器は口縁端部 a・b 類の薄手が目立つ。在地系では坏 Bo が見られ、遺物の様相からは 16 世紀中葉頃に埋没したと考えられる。 ※詳細は表 3－19 に参照
	26SK011	土坑	東西 2 m～ 3.1 m×南北 4.6 m×深度不明（検出で留める）	4.10	-	検出時の平面プランはやや歪な逆Ｌ字状を呈す。全面で土器廃棄がなされ、特に、北側では集中的に廃棄される。口縁部を上向きに置いたような出土状況が見られ、意図なく投棄したようなではなく廃棄の単位がありそうである。本遺構からは金箔土師器が出土する。館Ⅳ～Ⅴ期にかけての遺構と考えられる。 ※詳細は表 3－20 を参照。
	26SK012	土坑	東西 1.6 m＋α×南北 4.6 m×深度 0.7 m	4.10	3.40	調査区外の市道へと広がるため形状は不明。土師器小破片の出土が多く、廃棄土坑の可能性が考えらえる。 破片資料からの判断となるが、館Ⅳ期には埋没か。

表 3-27　館Ⅴ期（相当含む）遺構一覧表③

整備ゾーニング	検出遺構（遺構番号）	遺構種別	検出規模	検出標高（m）＊最高値	底面標高（m）	遺構概要等
中心建物域	26SK019	土坑か	東西 3.3 m＋α×南北 2.0 m×最大深度 1.1	4.10	3.00	長土坑と想定される土器廃棄遺構。断面は逆台形状を呈し、埋土中からは炭化物や土器破片が多量に出土する。その他、赤漆塗の木製品なども認められる。館Ⅳ～Ⅴ期に該当する。
	26SK020	土坑	東西 3.9 m×南北 2.7 m×深度不明（検出で留める）	4.10	-	平面プランは不定隅丸長方形を呈す。遺構上面において京都系土師器が集中的に廃棄されている。破片資料も分布するが、完存するものも多数あり、それらは口縁部を上にし正位置で置かれるように廃棄されているように見れる。検出で留めているため土器の垂直分布がどの遺構のどの位置にあたるのかは不明帳である。土器は、26SK011・019 よりも新しい傾向が看取できる。館Ⅴ～Ⅵ期に該当する。
	17SK085	土坑	南北 3.5 m×東西 1.6 m×深度 0.65 m	4.78	3.65	京都系土師器廃棄土坑。埋土中には土器とともに炭が多く含まれる。遺物編年上、館Ⅲ -2 ～Ⅳ期に該当する遺構であるため、館Ⅴ期段階には該当しないと考えられる。
	20SK070	土坑	東西 5.4 m×南北 1.8 m×深度 1.3 m	5.00	3.70	遺構の一部を中世 6a 期の備前焼擂鉢破片が出土するピットなどに掘り込まれるかわらけ一括廃棄土坑。土層堆積から 2 回以上の掘り返しが確認される。
	20SK065	土坑	東西 11.4 m×南北 2.6 m×最大深度 1.6 m	5.00	3.40	夥しい数の京都系土師器の廃棄土坑。33SX150 に掘り込まれるため、館Ⅴ期以前に埋め戻されている。京都系土師器の形状から館Ⅳ期までに形成されたものと考えられる。出土遺物は京都系土師器が主体であるが、在地系土師器も一定量認められ、京都系土師器に似せた回転台成形の土器も少数確認される。
	50SK055	土坑	東西 2.4 m×南北 5.5 m×最大深度約 1.0 m	4.50	3.50	隅丸長方形のかわらけ一括廃棄土坑。土層堆積から 3 回以上の廃棄単位が確認される。。破砕された京都系土師器の廃棄と完形率の高い廃棄の単位が認められる。
	50SK380	土坑	東西 1.8 m×南北 4.5 m×最大深度約 1.0 m	4.50	3.50	隅丸長方形のかわらけ一括廃棄土坑。破砕された京都系土師器が大量に廃棄されている。上面を粗砂で覆う。
	50SK395	土坑	東西 1.7 m×南北 4.0 ＋αm×最大深度約 1.0 m	4.50	3.50	隅丸長方形のかわらけ一括廃棄土坑。破砕された京都系土師器が大量に廃棄されている。上面を粗砂で覆う。
外郭域	40SX013	掘り込み整地跡	東西 4.3 m＋α×南北幅 3.2 m	4.75	4.20	大友氏館跡東外郭の基礎構造跡と考えられる版築状の固く締まった堆積が途切れた部分に掘り込まれている。中心建物の東面にあたりるため何らかの構造物を設けるための下部施設の可能性がある。整地をどのように形成・施工しているのか具体的に示す必要がある。※詳細は表 3-24 を参照。
	48SX040	掘り込み整地	東西約 4.1+ αm×南北約 2.6 m×深度 0.4 m	4.80	4.40	40SX013 の北側約 30 mの地点で検出した隅丸方形の土坑状に掘り込まれた掘り込み整地跡である。この掘り込み整地により、東外郭に伴う整地が南北に約 2.6 m程途切れており、開口部と考えられる。※詳細は表 3-24 を参照。
	22SX022	掘り込み整地	東西長約 4.3 m＋α×南北幅 3.6 m×深度約 0.8 m	4.80	4.00	40SX013 の南 60 mの地点で検出した掘り込み整地跡である。浅鉢状の断面形を呈し、掘り込み深度も深い。埋土の堆積状況からは版築や巻き出し転圧が施工されたような様子は看取できない。構造物の為の整地とすると簡易な造作といえる。上層及び最下層から京都系土師器皿が出土する。※詳細は表 3-24 を参照。
	28 次積み土遺構	積み土遺構	粘土・砂・砂利の互層（固く締まる）周辺の大部分は撹乱されており極一部が残存していた	6.00	5.50	大友氏館跡東外郭の施設であり、粘土・砂・砂利の互層が顕著な遺構で、他の遺構群より検出される高さが高いため立体的構造を成すものと考えられる。大友館東外郭は築地であることが指摘されており、構造・検出状況からその可能性がある。※詳細は表 3-24 を参照。
	48SX005	東外郭に伴う整地	埋土は固く締まる東西約 4.5+ αm深度約 0.3 m	4.70	4.40	調査区の中央付近を縦断する形で確認。埋土は粘土と砂混じりであり、固く締められている。整地の西端の立ち上がりが確認されており、最大幅で 4.5+ α m になると考えられる。※詳細は表 3-24 を参照。
	45SX040	東外郭に伴う整地	東西約 4.3+ αm×南北約 32 m×深度約 0.2 m	4.90	4.66	調査区を縦断する形で砂利を含んで硬化した砂質土を確認。大部分が後世の撹乱により削平を受けているが、遺構の西側部分で掘り込みを確認した。※詳細は表 3-24 を参照。
	22 次硬化層	整地跡	南北長 6 m	4.90	4.70 ～ 4.60	大友氏館跡東外郭（推定築地）の基部と想定される整地跡で、本地点から北に向かって（40 次・45 次・48 次）溝状に伸びる。大きく二つの層で構成され、ともに硬く締まる。22 次地点では南側に SX022 が認められるが、直接新旧関係は有さない。撹乱等のより掘削されているため規模は不明である。※表 3-24 を参照。

表 3-28　館Ⅴ期（相当含む）遺構一覧表④

整備ゾーニング	検出遺構（遺構番号）	遺構種別	検出規模	検出標高（m）＊最高値	底面標高（m）	遺構概要等
外郭域	40SX100	整地跡	北側検出長約 4 m 南側検出長約 10 m 東西幅約 5 m（推定）	4.70	4.30	発掘調査段階では遺構番号が付されていないため、今回 SX100 とする。大友氏館跡東外郭（推定築地）の基部と想定される整地跡で、南北（22 次・45 次・48 次）方向に溝状に伸びる。この整地跡が途切れた部分に、40SX013 が掘り込まれている。近世以降の開発により多くの部分で削平をうけている。
	49SD130	溝跡	検出幅約 5 m×最大深度約 1.5 m	4.00	―	大友氏館跡北外郭に伴う外溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。土層の堆積状況から大きく 3 回程度の掘り直しが行われている。断面形状は古い順から、逆台形状→Ⅴ字状→緩Ⅴ字状→幅広のＵ字状を呈す。
	50SD200・300	溝跡	検出幅約 5 m×最大深度約 1.5 m	3.90	2.40	大友氏館跡北外郭に伴う外溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。土層の堆積状況から大きく 3 回程度の掘り直しが行われている。断面形状は古い順から、逆台形状→Ⅴ字状→緩Ⅴ字状→幅広のＵ字状を呈す。幅広のＵ字状は町屋段階の掘削と考えられる。
	41SD005	溝跡	検出幅 2.4 m + α×最大深度 1.6 m	3.95	2.35	大友氏館跡北外郭に伴う外溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。SD005 の北側にも本溝よりも古い溝跡（SD004）を確認した。※表 3 - 21 を参照。
	7SD041	溝跡	検出幅約 1.0 m×最大深度約 0.4 m + α	3.65	不明（削平）	大友氏館跡北外郭に伴う外溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。溝底面に張られたと考えられる拳大の礫が出土する。※詳細は表 3-21 を参照。
	48SD080	北外郭に伴う内溝	検出幅約 1.3 m×最大深度約 0.7 m	3.90	3.20	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。断面形状はＵ字状を呈す。大量の粗砂で埋められており、短期間で埋められたものと考えられる。溝内からは人頭大の円礫が出土。南には屈曲せずに止まる。
	49SD135	北外郭に伴う内溝	検出幅約 1.3 m×最大深度約 0.7 m	4.00	3.30	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。土層の堆積状況から大きく 2 回程度の掘り直しが行われている。断面形状はＵ字状を呈す。溝内からは人頭大の円礫が出土。
	50SD230・285	北外郭に伴う内溝	検出幅約 1.3 m×最大深度約 0.7 m	3.90	3.20	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。土層の堆積状況から大きく 2 回程度の掘り直しが行われている。断面形状はＵ字状を呈す。溝内からは人頭大の円礫が出土。
	10aSD041（042・043）	溝跡	新 : 検出幅約 1.0 m×深度約 0.8 m 古 : 検出幅 2.0 m + α×深度 1.4 m	3.92	新 :3.05 古 :2.55	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。土層の堆積状況から大きく 4 回程度は掘り直されている。「新」は最終段階、「古」は掘削当初の規模を表示している。溝断面は古い順から緩Ⅴ字形→幅広のＵ字状→Ⅴ字状を呈し、南壁面の傾斜がきつい傾向である。 ※詳細は表 3 - 21 を参照。
	41SD006	溝跡	検出幅 2.3 m + α×深度 0.9 m	3.90	3.00	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。館 18bSD018 等につながるもので、他の地点同様 2 回程度掘り直されている。 ※詳細は表 3 - 21 を参照。
	18bSD018	北外郭に伴う内溝	新：検出幅約 1.68 m×深度約 0.7 m 古：検出幅約 2.4 m×深度 1 m	3.94	新 :3.20 古 :2.90	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。土層の堆積状況から大きく 2 回掘り直しが行われ、断面形状は古い順からⅤ字状→逆台形→Ⅴ字状を呈す（古い溝は SD015 の番号を付す）。 ※詳細は表 3 - 21 を参照。
	43SD004（2 トレンチ）	溝跡	検出幅約 2.9 m×深度約 1 m	3.70	2.70	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向の溝跡である。新旧関係が認められ大きく 2 つの時期あることを確認することができた。埋土からは溝壁面に張られたと推測できる拳大の礫や軒丸瓦・軒平瓦が出土している。
	7SD006	溝跡	検出幅 1.5 m×最大深度約 0.75 m	3.30	2.40 ～ 2.50	大友氏館跡北外郭に伴う内溝と推定される東西方向に伸びる溝跡である。土層堆積状況から 3 ～ 4 回程度掘り直しが行われる。断面形状は掘削当初はⅤ字形様逆台形であるが、次第に底が広がってくる。調査区内では、東から西に向かって溝底面が傾斜する。出土遺物には瓦破片や、備前焼擂鉢・土師質土器鍋といった雑器類が比較的多い。※詳細は表 3-21 を参照。
	41 次 SX030	積み土状遺構 道路状遺構	検出幅 1.4 m×深度 0.2 m 砂や粘土を固く締める	4.00	3.80	掘方内にシルトと砂をそれぞれ薄く重ねて互層状に構築している遺構で、積み土状遺構もしくは道路状遺構と考えられる。南側を SD006 に掘り込まれ、SD007 に切られる。SD006 とは同時期の可能性が考えられる。しかし、撹乱（建物基礎）等で削平されている部分が多く、情報が少ないため周辺の成果との整合性が必要である。
	7SX200（積み土状遺構 B）	積み土状遺構	検出された積み土の層厚は約 0.25 m 砂・砂質土・シルト質土・粘質土が水平に堆積する	3.76	3.51	発掘調査段階では遺構番号付されていないため、今回 SX200 とする。大友氏館跡の北側を区画する構造物の断片と想定されるが、SD041 より新旧関係が古い SD040 に掘り込まれるため、SD040 の出土遺物の概観から 16 世紀中葉以前の形成と考えらえる。

表 3-29　館Ｖ期（相当含む）遺構一覧表⑤

整備ゾーニング	検出遺構（遺構番号）	遺構種別	検出規模	検出標高（m）＊最高値	底面標高（m）	遺構概要等
外郭域	46SD020（050）	溝跡	検出幅約 5 ～ 4 m×深度 1.5 ～ 1.3 m	3.90	2.40	大友氏館跡南西から南側にかけてＬ字状を呈すが、屈曲地点において、北から直線的に伸びてきた溝はさらに館の外（南方向）へと延伸するため全体としてはＴ字形をなす。館南外郭の外溝と想定される。構築時に溝底に 0.1 ～ 0.15 mの厚さで粘土を張る。SD020 では、館側から大量のブロック土が入る状況が確認されており、周辺に構造物が存在した可能性がある。SD020 と SD015 からは近世 1 期の備前焼甕が出土しており、同時期に機能していた可能性が高い。その他、大量の壁土、人頭台の礫が出土している。※詳細は表 3-22・23 を参照。
	46SD015（070）	溝跡	検出幅 2 ～ 1.5 m×最大深度 1.1 m	3.90	2.80	大友氏館跡南西から南側にかけてＬ字状に屈曲する溝跡で、外郭の内溝に想定される。しかし、北側に位置する館 2・19 次調査区では確認されていないため、途中で収束すると考えられる。　※詳細は表 3-22・23 を参照。
	町 63ASD080	溝状の掘り込み遺構	検出最大幅 3 m ＋ α×深度約 1.7 m ＋ α	3.98	2.30 m 以下	大友氏館跡の南外郭に伴う外溝と推定される掘り込みであるが、検出地点の状況から町 63 次では断片的な掘削となっている。土層堆積は複雑な様子を呈しているが、大きく 3 回の掘り直しが行われ、時期が新しくなるにつれ溝底面の標高は高くなる。　※詳細は表 3-23 を参照。
	町 63ASD001	溝状遺構	検出幅約 1.55 m×最大深度約 0.7 m	4.06	3.30	大友氏館跡の南外郭に伴う内溝と推定される溝状遺構である。断面形状は逆台形を呈し、両壁面は直立するように立ち上がる。溝底面は浅く段掘り状になる。※詳細は表 3-23 を参照。
庭園域	R2 年度整備工事終了。庭園域の整備高や景観を中心に中心建物域や西建物域の隣接ゾーンは整備内容を配慮する必要がある。					
北建物域	発掘調査成果では館Ｖ期の整地を確認。当時の地形高等を考慮して整備を行う。また周辺の花粉分析等から修景含めた植栽等も全体プランの中で考慮することとする。					
西建物域	44SB070	建物跡	柱間距離 6 尺 5 寸と 5 尺間隔の南北 4 間×東西 2 間	4.66	-	掘り込み整地①の範囲に収まるように配置される建物跡である。建物軸は N-4°-E を指向する。柱穴の規模は 0.2 ～ 0.4 m程であるが深度が浅いことから礎石の据え付け痕であった可能性が考えられる。周辺では 16 世紀中頃～後半頃の土師器廃棄遺構が分布する。
	44 次掘り込み整地①・②	整地跡	"①南北約 14 m＋α、東西約 13 m＋α ②南北約 14 m＋α、東西約 10 m＋α"	4.66	4.40	2 つの単位の掘り込みを伴う整地を確認した。16 世紀後半頃の京都系土師器の小破片を含み整地下部には親指大の小礫を多量に含み、中心建物域に該当する館 17 次の整地と共通する。東側の掘り込み整地周辺では白色の玉砂利が集中して出土した。
	44SE030	井戸跡	径約 2.0 m（井筒部径約 1.0 m）	3.90	2.10	掘り方内に円形の井筒が確認され、内部からは多量の黒色玉砂利が出土した。黒色玉砂利の下層では円礫を多量に確認した。また井筒内から 16 世紀後半頃の京都系土師器が出土している。
	43SE004（5 トレンチ）	井戸跡	径約 2.2 m（井筒部径約 0.5 m）	4.00	2.00	井筒部から完形の京都系土師器が出土し、埋土には 2 ～ 5cmほどの礫が多く含まれている。礫の一部には礎石の可能性があるものも含まれる。検出面より約 1.6 m下位の標高 2.4 mの地点において木枠を確認し、僅かながら湧水も認められた。
	2SD030	溝跡	検出幅 2.4 m×検出長 8 m	4.30	-	館の西外郭の中央付近で東西方向に伸びる溝跡である。16 世紀中葉に埋め戻される 2SD035 を掘り込み、館Ｖ期段階には埋没する。
	44SK015	廃棄土坑	長辺 1.1 ×短辺 0.8 m×深度 0.24 m	4.03	3.79	坏 B が主体であるが、16 世紀中頃～後半頃の京都系土師器皿が出土する。土師器内面に炭化物が顕著である。炭化物と共に魚骨、少量の礫が出土。
	44SK102	土坑	長辺 1 m×短辺 0.8 m×深度 0.42 m	4.11	3.69	16 世紀中頃～後半頃の京都系土師器皿が出土する。土師器内面に炭化物が顕著である。炭化物と共に魚骨が出土。
	46SK010	廃棄土坑	長辺 1.7 m× 1.4 m×深度 0.3 m	4.09	3.79	炭化物や貝類、少量の礫が出土する。
	46SK059	廃棄土坑	長辺 4.4 m×短辺 1.5 m×深度 0.3 m	4.09	3.79	京都系土師器皿や凝灰岩製羽口とともに多量の炭化物、凝灰岩破片、鉄滓が出土する。
	46SK060	廃棄土坑	長辺 2.6 m×短 2.1 m＋α×深度 0.5 m	4.09	3.59	完形の京都系土師器皿の比率が高く、多量の土師器皿とともに短刀や銅銭が出土した。

③文献史料に記される大友館

木砕之注文（きくだきのちゅうもん）

「木砕之注文」は、淡路国洲本の斎藤家に伝わる木割書である。斎藤家は、淡路国分の徳島藩「御大工」であり、その先祖は代々大友氏の「惣大工」であった。木割書とは、建物の寸法を割合で記したもので、「木砕之注文」は、寿彭が先祖代々伝わる木割を 84 歳の時にまとめ、成立年代は干支から永禄 5 年（1562）、または天正 2 年（1574）とされる。その翌年、隠居した寿彭が其盛に譲り、其盛が天正年間に内容を追加し完成させた。

「木砕之注文」は、木割書として古くは応永元年（1394）まで内容が遡り、建築技術史の面で貴重な史料として既に評価されているが、「木砕之注文」には、木割書のほか、建物や細工物の寸法、作事や祝儀の記録が記される。施設名が判明または推測できる建築物が 24 あり、18 が大友館か府内近郊であり、大友館や府内の建築物や当時の道具についても知ることのできる貴重な史料である。

表 3-30 「木砕之注文」に見える大友館の建物

	和　暦	西　暦	建　物	内　容
1	年未詳		二皆の主殿	御屋形様以前ノ御二皆ノ御主殿寸凡取置候
2	文明 8 年	1476	主殿二皆	御屋形様御主殿二皆作御祝儀之事
3	永正 18 年	1521	簾中方主殿	御簾中方御主殿御棟上御祝儀之事
4	天文 10 年	1541	対面所	御屋形様御対面所御役所高田庄
5	天文 15 年	1546	（主殿か）	御棟上之事（御屋形義鑑様御座候）

当家年中作法日記

「作法日記」は、22 代当主の大友義統が、大友家で行われていた年中行事を後代のために書き記した史料である。文禄 2 年（1593）に豊後を除国された大友義統は、周防国山口に幽閉され、翌年常陸国水戸に移されており、文禄 4 年（1595）に「作法日記」を編纂した。

「作法日記」では、大晦日の夜から一年間、大友館で行われる年中行事を日付順に、行事の内容や担当奉行、役の負担者、出される料理の献立や膳組、行事で使われる物などが記されている。また、館内の諸施設名も記述されており、大友館内の建物構成を検討する基本史料ともなる。

「作法日記」に記された行事が行われた時期は、史料上に登場する人名から永禄年間（1558 ～ 1570）後半から天正年間（1573 ～ 1592）前半の大友氏の全盛期と考えられ、この時期を中心に「到明寺殿代（大友義鑑の代）」まで・「宗麟代」・「近年」の年中行事の内容を補って記されている。

表 3-31 「作法日記」に見える大友館内の施設・建物

施設・建物名	内容	初出条
大表	政務が執られ、各種儀式・行事が行われる、館の中心施設となる主殿のこと。	正月祝を大歳の夜に飾る次第
坪	建物に囲まれた小さな庭。	正月朔日から出される膳組次第
記録所	侍衆が役勤めのため館に出仕してきたことを証明する着到状を提出し、これを記録する場所。	正月朔日対面儀式次第
庭	主殿と舞台の間にあったと考えられる。	正月朔日対面儀式次第
舞台・能舞台	能舞台のこと。	正月二日馬乗始・二十九日大表節
納殿	大友館の場合、食材を納めておく場所	正月二日船乗始
大門	館の正面（東側築地）に設けられていた正式な出入り口門。	正月七日　七日正月祝
遠侍	館の警固役武士の詰所。一般に玄関の近く、主殿から離れた場所に設けられた。	正月十四日由原宮より花参る
遠侍の大庭	遠侍の前にある庭のことか。	正月十四日由原宮より花参る
対面所	武家屋敷内で、当主が家臣との対面儀礼を行なう施設。	正月十四日由原宮より花参る
鎧門		正月十四日由原宮より花参る
厩	当主が乗る馬を繋養していた場所。	正月十四日由原宮より花参る
贄殿	一般に贄殿とは食物とする魚や鳥を蓄え、調理する場所。大友館では、当主の膳に関わっていた。	正月十四日由原宮より花参る
表座敷・表の座	主殿の中心となる座敷。	正月十九日簾中方節・二十九日大表節
楽屋	舞台に付属する、能を演じる猿楽衆の控室。	正月二十九日大表節
細工所	一般に調度品や小道具類の製作や修理を担当する施設。大友館では日常道具新調を担当している。	六月十五日祇園会
馬立所	八朔儀式で家臣などから進上された馬を繋ぎ留めておく場所。	八月朔日八朔儀式
蔵	表部分にある、金品などを収める建物。	正月蔵開き
[御台]	役職に「御台番」が確認できる。配膳などを行う台盤所、いわゆる台所のことである。御台盤衆の役割からすると、館の公的空間である表部分にあったと考えられる。	正月朔日梅干にて茶参る
[文所]	大友家に伝わる公文書や書物などを収める施設。	七月七日七夕
[小納殿]	役職に「小納殿衆」が確認できる。既出の納殿と小納殿が別の施設なのかは不明。	正月椀飯・鏡餅遣わし方
奥	政治に関わる公的空間である表と当主夫人らの生活空間である簾中方とも異なる、当主の日常生活の場である常御殿を中心にした公私が相半ばする空間と考えられる。	正月十九日簾中方節
公文所	大友氏直轄領の各種租税徴収に関わる施設で、各種儀式や行事に関わる様々な品々の調達も担当。宿老と聞次の夫人が簾中に対面する場所であり、公文所付の「女中」もおり、公私相半ばする施設であった。	正月五日簾中へ参上
代々公方と大友家先祖の霊前（仏殿）	七月十四日、代々公方と大友家先祖の霊前にお供えをするとあり、これらの霊を祀る仏間か仏殿が、常御殿の中か、奥に独立した建物としてあったと考えられる。	七月十四・十五日先祖供養
[風呂屋]	役職に「風呂屋方」が確認でき、正月四日は「風呂始」の日でもあった。当時の風呂は蒸し風呂で、「風呂屋」との記述からすれば独立した建物と考えられる。常御殿の近くにあったものか。	正月四日風呂始、正月二十九日大表節
[奥の蔵]	役職に「奥の蔵番」が確認できる。奥部分にある蔵。	正月祝を大歳の夜に飾る次第
簾中方	当主夫人の御座所を中心とした、当主夫人らの生活空間。	正月朔日から出される祝次第
一の台・寝所	簾中方にあるものの、当主夫人の御座所とは別の、当主の寝所を含んだ建物。	正月朔日梅干にて茶参る

※ [] は役職名からその存在を推測できる施設

参考 「当家筆法之抄条々」のみに見える施設

御茶之内	役職に「御茶之内御番」が確認できる。茶を点て、茶道具を収納する施設か。	16 条
御火焼所	当主が手や顔を洗う際のお湯を沸かす場所。	20 条

表 3-32　一次史料に見える大友館との関連が考えられる建物

	建物名	年月日	西　暦	史料名	出　典
1	館	（享禄三年) 四月三日	（1530）	大友義鑒感状	『増補訂正編年大友史料』15-366
2	公文所	（享禄ヵ）三年（十一）月八日	（1530）	若林仲盛書状案	『豊後国公領史料集成』6 佐賀郷 59
3	座敷	享禄四年十一月	（1531）	問注所親照鑑豊覚書	『増補訂正編年大友史料』18-432
4	風呂	（年未詳）正月十六日		大友義鑑書状	『増補訂正編年大友史料』17-390
5	門	（年未詳）十二月廿五日		大友義鑑書状	『増補訂正編年大友史料』17-400
6	土蔵	（天文十三年）閏十一月十八日	（1544）	大友義鑑書状案	『増補訂正編年大友史料』18-248
7	台所	（天文十六年）閏七月廿四日	（1547）	大友義鑑書状	『豊後国公領史料集成』7 下直入郷 135
8	両てん（両殿）	天文十六年十月廿六日	1547	田尻親種府内参府日記	『豊後国公領史料集成』5 上勝津留 111
9	馬屋	天文十六年十月廿六日	1547	田尻親種府内参府日記	『豊後国公領史料集成』5 上勝津留 111
10	遠侍	（天文十六年）壬七月廿三日	（1547）	大友義鑑書状	『増補訂正編年大友史料』18-361
11	屋敷	年未詳三月廿八日		大友義鑑書状案	『増補訂正編年大友史料』18-462
12	女中屋	年未詳十二月廿八日		大友義鑑感状	『増補訂正編年大友史料』18-535
13	文所	天文十九年二月十二日	1550	大友義鑑遺言状	『増補訂正編年大友史料』19-7
14	主居・各居	天文廿一日正月五日	1552	（永弘文書）	『増補訂正編年大友史料』19-212
15	御屋	弘治三年十一月十三日	1557	大友義鎮書状	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』2-517
16	御屋	永禄元年四月二日	1558	大友家加判衆連署状写	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』2-541
17	御屋	永禄元年五月□日	1558	大友家加判衆連署状写	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』2-542
18	長囲屏	（元亀元年頃）十一月一日	（1570）	大友氏奉行人連署奉書	『豊後国公領史料集成』5 上笠和郷 140
19	土囲廻塀	（元亀三～天正元年）九月二三日	（1572～73）	大友宗麟書状写	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』3-1023
20	土囲廻塀	（元亀三～天正元年）十月二四日	（1572～73）	大友宗麟書状	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』3-1031
21	土囲廻塀	（元亀三～天正元年）十一月十一日	（1572～73）	大友宗麟書状写	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』3-1036
22	土囲廻塀	（元亀三～天正元年）十一月十一日	（1572～73）	大友宗麟書状写	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』3-1037
23	土囲廻塀	（元亀三～天正元年）十二月二日	（1572～73）	大友義統書状	『熊本県史料　中世編 4』「田北文書」6
24	東之築地	（年未詳）		大友義統神領安堵	『増補訂正編年大友史料』23-465
25	縁	天正五年十二月十二日	1577	朽網宋歴家訓案	『増補訂正編年大友史料』23-509
26	遠侍・番衆	天正五年十二月十二日	1577	朽網宋歴家訓案	『増補訂正編年大友史料』23 509
27	小門	（年未詳）九月三日		大友宗麟書状写	『大分県先哲叢書　大友宗麟資料集』5-1698

※（　　）は、史料に年号の記載がない、無年号の史料のため、年代比定をした年号。

（2）唐人町跡

唐人町は、大友館の北東隅の北側に位置し、南北道路に沿って約 120 mの範囲に及ぶ。唐人町が文献上ではじめて確認できるのは、伊勢宮御師によって記された『天正十六年参宮帳』である。しかし、1580 年代前半の景観を描いていると想定される「府内古図」の記載や発掘調査による出土遺物の様相から、府内の最盛期（16 世紀後半）にはすでに町が形成されていたと考えられる。

この参宮帳によると、唐人町には「ゑんはい」「けんさん」「ふくまん」「月山」等中国系と思われる人物の名前がみられる。また「与三郎」「新四郎」等純粋な日本人と思われる名前も認められることから、唐人町は日本人と中国系住民が混住する「チャイナタウン」のような町だったと推定される。

天正 14 年（1586）の島津軍の豊後侵攻で火災により焼亡したが、その後急速に復興したことが発掘調査によっても明らかになっている。島津氏侵攻までは、南北道路西側のみの片側町（以下、片側町段階）だったが、島津氏侵攻後の復興の段階で両側町（以下、両側町段階）になったことが発掘調査により判明している。その後、唐人町は、慶長 7 年（1602）の城下町移転政策により、近世府内城・城下町へ移転したと考えられる。

また、全国の中世都市遺跡の「唐人町」としては、大名館に隣接する事例は極めて稀である。これは、大友氏の海外交易に対する政治姿勢を示唆する配置と考えられる。

唐人町で使用されたと推定される出土遺物には、ヨーロッパ産、中国産をはじめとする舶載品が他の調査地点に比して質・量ともに突出した様相を示しており、大友氏遺跡の「南蛮文化発祥の地」「国際貿易都市遺跡」としての本質的価値を具体的に示す遺跡であるといえよう。

①発掘調査の経過と概要

唐人町の想定範囲とその周辺の発掘調査には、以下の調査が該当し、南北道路の西側で 3 地点、東側で 4 地点、町の北端付近で 1 地点の、合計 8 地点の調査が実施されている。

- 大分市教育委員会による中世大友府内町跡第 14 次調査・第 161 次調査
- 大分市教育委員会による中世大友府内町跡第 117 － 2 次調査
- 大分県教育委員会による中世大友府内町跡第 11 次・72 次・80 次・88 次調査

大分都市計画道路中島錦町線の建設に伴う調査の一環として実施した 117 － 2 次調査では、唐人町の北端と稲荷町を区切る木戸跡が確認され、これにより唐人町の南北範囲が確定し、南北の木戸間は約 120 mとなる。また、国道 10 号改良工事に伴う調査で、唐人町の東側に位置する寺院「称名寺（しょうみょうじ）」の跡地に、1570 年代頃に掘削された大規模な堀が発見された。この堀からは、土器・陶磁器や木器等の生活用品をはじめ、食料として消費された貝殻や動物骨等、大量の遺物が出土した。堀の内部に堆積した土層の検討により、出土遺物については称名寺側から流入したも

のも一部認められたが、その大半は唐人町側から投棄されたものと推定される。さらに、唐人町の町屋の建物付近から出土した破片と堀からの破片が接合するものも認められていることから、16 世紀後半に掘られた称名寺跡地の堀は、唐人町の住民のゴミ捨て場としても利用されていたことが想定される。

第 14 次調査と第 161 次調査は、片側町段階の唐人町エリア内の調査である。第 14 次調査地点は町屋の裏手部分にあたり、井戸跡や掘立柱建物跡を構成する柱穴群が確認されている。第 14 次調査の北側に位置する第 161 次調査では、16 世紀後半以降の礎石建物の一部を構成すると考えられる礎石 2 基や、15 世紀代の東西溝が確認されている。遺跡の遺存状況は総じて良好である。

②調査成果の概要

唐人町跡、称名寺跡地の堀からは唐人町の住民が使用、廃棄した多くの遺物が出土している。なかでも中国系住民の存在を考古学的に傍証できる遺物があり、注目される。

1 つ目は「鎹接ぎ」のある陶磁器の破片である。これは中国大陸で一般的に行われていた修理方法であるが、日本で出土するものは高級陶磁器に限られる。しかしながら、唐人町から出土したものは一般の生活に使用されるありふれた陶磁器であることから、貿易従事者が中国で修理したものを、自らの生活用品として持ち込んだものと推定される。2 つ目は「骨牌」と呼ばれる中国式のゲームで使用された骨角製品であり、中国系住民がこのゲームを楽しんでいた可能性が指摘される。3 つ目は食用にされたウシやブタの骨で、これらの食材は当時の日本人の食生活では一般的でなかったものであり、中国系住民の存在を示唆していると考えられる。

また、出土遺物の中には、唐人町に住んでいた人々の生業を推定できる資料もある。

通常の遺跡からは出土することが極めて稀な窯道具や溶着した陶磁器破片が出土している。これらは陶磁器を扱う商人が中国の窯場から陶磁器を大量に買い付ける際に混入したものと考えられ、陶磁器の流通に関わった商人の存在が示唆される。また、大型坩堝や炉蓋からは、銅滓等の出土もみられることから青銅の加工に携わった職人がいたことが分かる。さらに、骨製の工芸品や未製品とその素材、脳天を割られた動物骨の出土は、骨細工職人や革鞣し職人の存在も示唆している。さらに鎗金技法（専用の刀を使用して文様を描き、そこに金箔や金粉を押し込む装飾技法）による唐枕や南ヨーロッパ産のガラス製杯は対外貿易によってもたらされた貴重な品物であり、有力な貿易商人が活動していたことを示している。

以上のように唐人町には 16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて多様な生業を持つ中国系住民が居住していたことを多彩な出土遺物は物語っており、加えて、商人、職人、貿易商人等が共存していたことを考古遺物によっても傍証することができる貴重な遺跡であるといえよう。

唐人町西側

片側町段階には町の東側を南北に延びる堀（町 80SD201）で区画しており、全容は不明であるが他の町屋にはみられない外郭施設が存在すると考えられる。礎石建物の一部が検出されており、島津軍の豊後侵攻以後も町屋として存続するようである。遺跡の遺存状況は良好である。

唐人町東側

唐人町東側は、町屋が形成される以前は、暦応 4 年（1341）に創建されたとされる時宗寺院称名寺の寺域であり、調査の結果からも 14 ～ 15 世紀に称名寺が存在したことが判明している。その後、称名寺が当地を移転した後、16 世紀後半～1586 年の島津軍の豊後侵攻の間は、大規模な堀を巡らせ、低い土塁または築地とみられる遺構をともなう公的な施設と考えられる「大規模施設」が形成される。島津軍の豊後侵攻後には「大規模施設」は再建されず、堀が埋め戻されたあと、礎石建物による町屋が形成され、唐人町は両側町となる。

南北道路と木戸

片側町段階の唐人町の前面を通る南北道路は、複数回の改修が認められる。16 世紀後半における南端（唐人町の南側入口）には府内では今のところ唯一の検出事例である礎石建ちの木戸跡が確認されている。北側の木戸跡が掘立柱構造のものである点と対称的である。さらにこの木戸の北側の道路には、唐人町側から約 20 度の傾斜をもって称名寺跡の堀に接続する竹管を使用した暗渠が道路方向に直交する方向に 4 本程度確認されている。唐人町側からの排水を堀へ流すための施設である。このような施設も府内では唯一のものである。さらに、島津氏の府内侵攻後は周辺の焼土を道路上に集め路面を嵩上げし、新たな路面を形成している。こうした状況をみると、長さ約 120 mにわたり南北道路に沿って展開する唐人町の特に南側（大友氏館側）に施設等の様々な点で特段の配慮がなされていることがわかる。

表 3-33　唐人町発掘調査概要表（1573 年頃～ 1602 年頃）

調査地点	南北道路西側の町屋（唐人町西側）：町 14 次・町 80 次・町 161 次	
概要	南北道路より約 20m奥にあたり、町屋の裏手が想定される地点。 道路に近い部分には礎石建物跡が確認できる。	
遺構	建物跡等	【両側町段階】 推定建物Ｂ：南北 5.7m× 東西 5.4m＋α程度。 その他、東西方向の柵または柱穴列あり。
	井戸跡	【片側町段階】 14SE128（井戸底側面を三和土で補強）、14SE230（桶組井戸）、14SE250 【両側町段階】 14SE240（鉄線引きの瓦出土）、14SE260（唐津焼出土） 14SE270（土師質製筒型井戸枠）
	堀	【片側町段階】 町 80SD201: 幅 1.6m以上、深度 1.4m、長さ 30m以上。 大規模な掘り直しを行う。

調査地点	南北道路東側の町屋（唐人町東側＝両側町段階）町 11 次・町 72 次・町 80 次・町 88 次	
概要	南北道路東側約 30m幅を調査しており、町屋の表から裏手までが一望できる地点	
遺構	建物跡等	礎石建物 1：北側に張り出し部をもつ東西 2 間（3.95m）、南北 3 間（4.48m） ※1 間は 6 尺 5 寸（197 ㎝）を基準。 礎石建物 2：東西 2 間（4.0m程）、南北 3 ～ 4 間程度（5.0m） 礎石建物 3：礎石 2 基のみが残る。
	井戸跡	町 72SE002 、町 80SE001（凝灰岩製石組）、 町 80SE002（凝灰岩製石組）、町 80SE173

調査地点	南北道路と木戸：町 11 次・町 72 次・町 80 次・町 88 次・町 117-2 次	
概要	大友館東側前面に所在する南北道路。唐人町南端と大友館・桜町との境界では 東西道路である名ヶ小路町と南北道路とが交差する「辻」を形成する。 南北道路は直進せずに、西側にクランクして交差する。 117-2 次調査では、唐人町と稲荷町の境にある掘立柱構造の木戸跡を確認。2 時期の ものがみられる。これにより唐人町の南北長が約 120mであることが判明。	
遺構	道路跡	版築状の工法により築造・ 【片側町段階】　町 80SF094：幅員約 5.0m 【両側町段階】　町 80SF006：幅員約 4.0 ～ 5.0m、1590 年以降の 唐津焼・瀬戸焼含む。
	側溝跡	【片側町段階】　町 80SD090（西側溝）、町 80SD090・097（東側溝） 【両側町段階】　町 80SD010・099（西側溝）、 町 80SD016・030（東側溝）
	暗渠跡	【片側町段階】　道路面下部に設定された暗渠。 太さ 0.15mの竹筒を横断させ道路側溝から溢れた排水を堀に流す構造。
	木戸跡	【片側町段階】　一対の礎石（礎石間 2.2m）で構成。 島津侵攻に由来する焼土層で覆われる。
その他	唐人町前面の木戸は国道 10 号施工時に埋戻し現地で保存されている。	

※【片側町段階】1573 ～ 1586 年　　【両側町段階】1586 ～ 1602 年頃

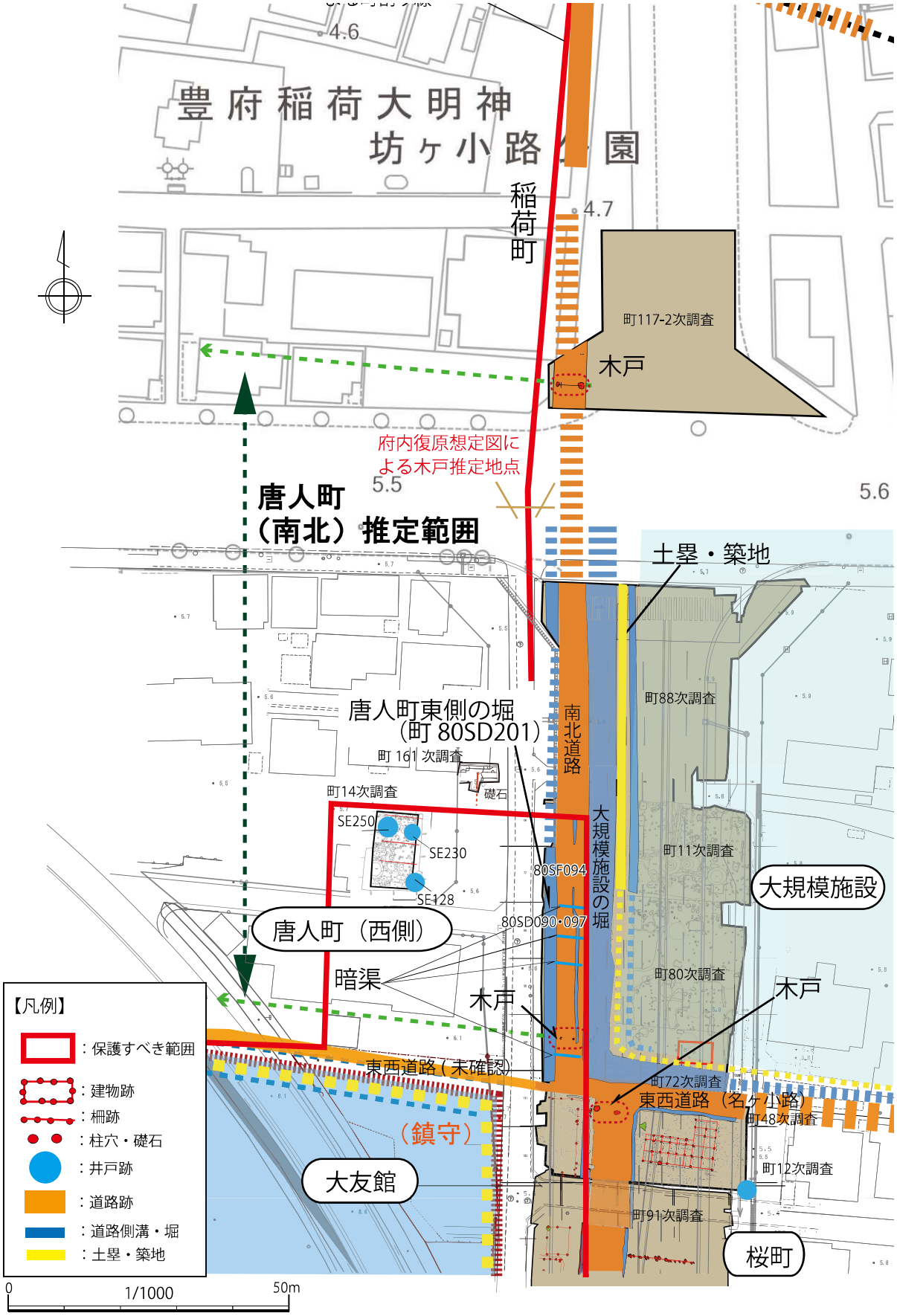


図 3-5　唐人町跡遺跡変遷図①【唐人町跡（片側町段階）　1573 年頃～ 1586 年】

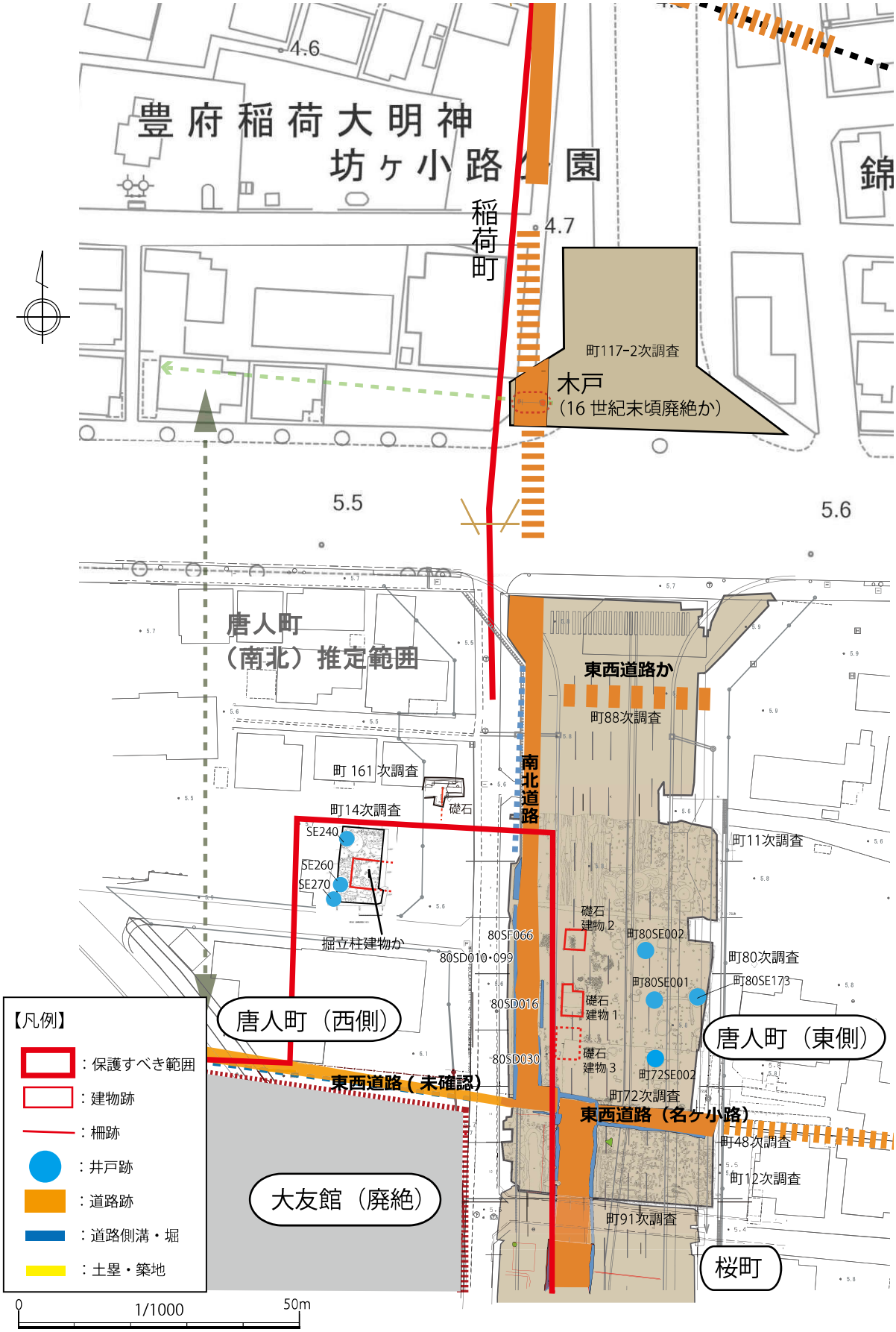


図 3-6　唐人町跡遺跡変遷図②【唐人町跡（両側町段階）　1586 以後～ 1602 年（町屋復興期）】

（3）その他の地区

①旧万寿寺地区

旧万寿寺地区は、鎌倉時代末期の徳治元年（1306）に 5 代当主大友氏貞親が創建したと伝わる臨済宗寺院であり、府内のまちで最も早く建設された主要施設であった。禅宗式伽藍配置は、三門・仏殿・法堂・方丈を一直線に並べ、西に浴室・鐘楼・西浄、東に東司（東浄）・僧堂（禅堂）を配置し、三門の前に放生池を掘り、その前方に総門を建てることが知られる。戦国期の万寿寺の施設を記述したといわれる「蒋山略記」には、三門が南に開き、仏殿、法堂、東西の方丈を、南北を軸とする中央に配置し、七堂伽藍も備えている一般的な禅宗式伽藍配置であったことが記されている。室町時代初期には十刹※に列せられた高位の寺院でもあり、16 世紀中頃～後半の時期には巨大な堀が寺域を囲んだ。

寺域は南北約 360 m、東西 250 m以上、計 7.2ha 以上と京都の著名な禅宗寺院に匹敵する規模をもつ地方最大級の禅宗寺院であった。

旧万寿寺跡の地上にて確認できる遺構としては、伽藍を囲む北側の堀跡の地形が一部に残っている他、旧施設の敷地内に残る伝経蔵跡地といわれる高まりがある。

なお、保護を要する範囲には、庄の原佐野線の道路用地を除いて、旧万寿寺の寺域とその北側に展開する堀之口町や清忠寺町が含まれている。

※五山十刹（ござんじっさつ）の制

鎌倉時代末期から南北朝期にかけての禅宗高揚期に、臨済宗を国家が掌握するために中国にならって導入された官寺制度である。幕府は、禅寺を五山・十刹・諸山の三段階に格付けし、住持（住職）の任命権・禅僧の階位などを官僚組織の統制下においた。なお、万寿寺は常に十刹の内に入る全国でも極めて格の高い寺院であった。

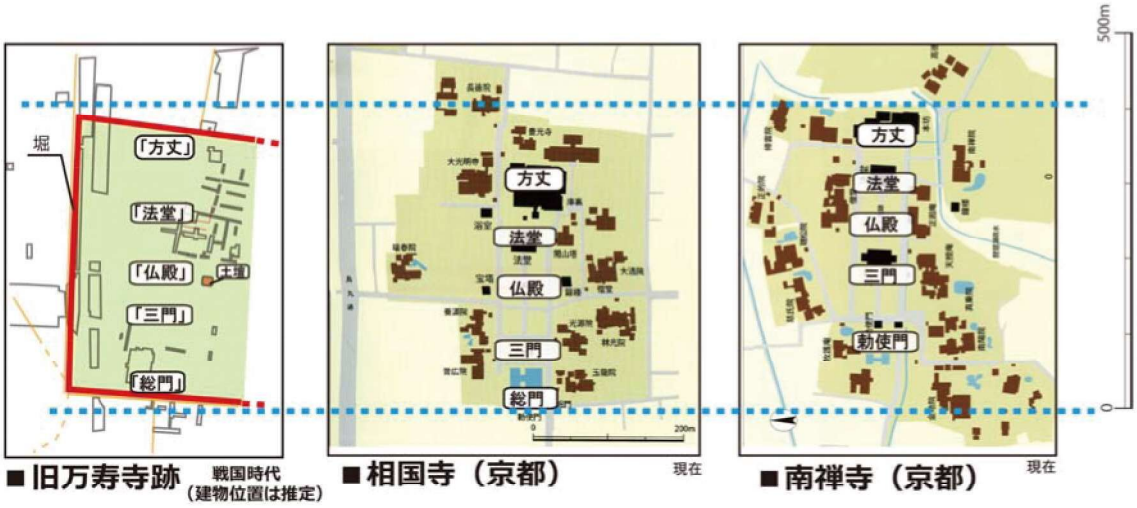


図 3-7　旧万寿寺跡と京都の禅宗寺院との規模比較

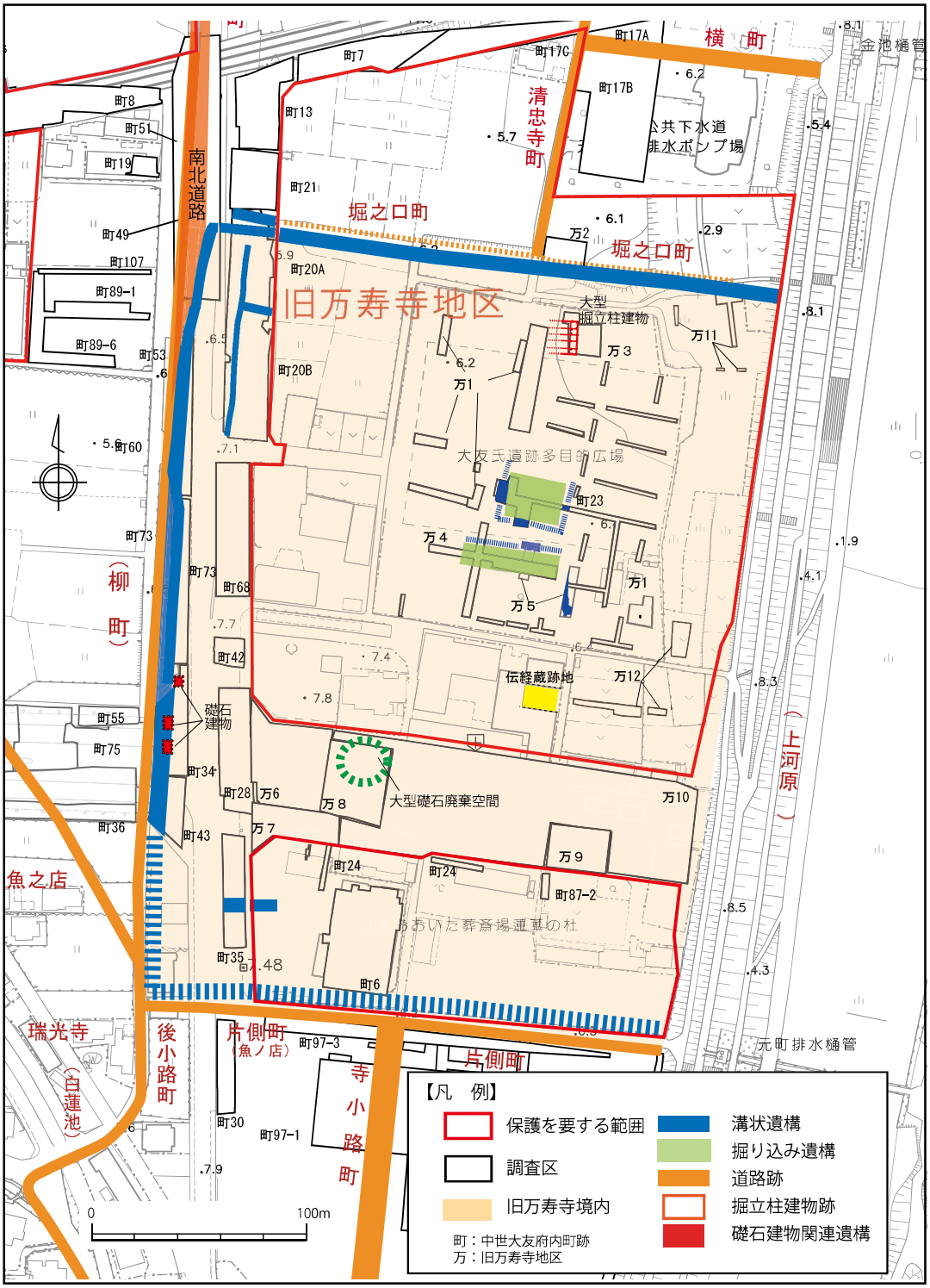


図 3-8　旧万寿寺跡地区遺構配置図（16 世紀中頃～後半頃の遺構を表示：1/3000）

②推定御蔵場跡

1581 年～ 1586 年頃の府内を描いたと推定されている「府内古図」は、現在 12 枚ほどが確認される。これらは図中に記載された各施設の有無などから、Ａ類～Ｃ類の３種に分類されている。推定御蔵場跡は、Ｃ類古図の中で、三方が白壁で囲まれ、内部に「御蔵場」「大友御蔵場」「蔵場」などと表記された地点をさす。

調査の結果、16 世紀後半～末の大型施設と、15 世紀前後から 16 世紀中頃の武家居館と考えられる建物跡付近で多量の土師器が投棄された穴や、「Ｌ」字に掘削された区画溝が確認された。

16 世紀後半～末頃になると、東・西・南・北を画する溝や築地状の遺構を備えた大型施設が形成される。施設内部には掘立柱建物跡や火災処理土坑とともに、広い空閑地が複数地点で確認されており、これまでの調査で確認されている町屋や武家・社寺地とは異なる様相を示すことが明らかとなっている。この大型施設は、東西約 205 m、南北約 85 mの長方形の範囲に概ね収まり、南東部（東西約 85 m、南北約 20 m）の張り出し部を含む面積約 1.8ha の「Ｌ字」状の範囲であると考えられる。

詳細は、今後の調査によるところも多いが、この範囲は蔵場としての利用を含め大友館に付帯する特別な公共空間として性格付けられる。

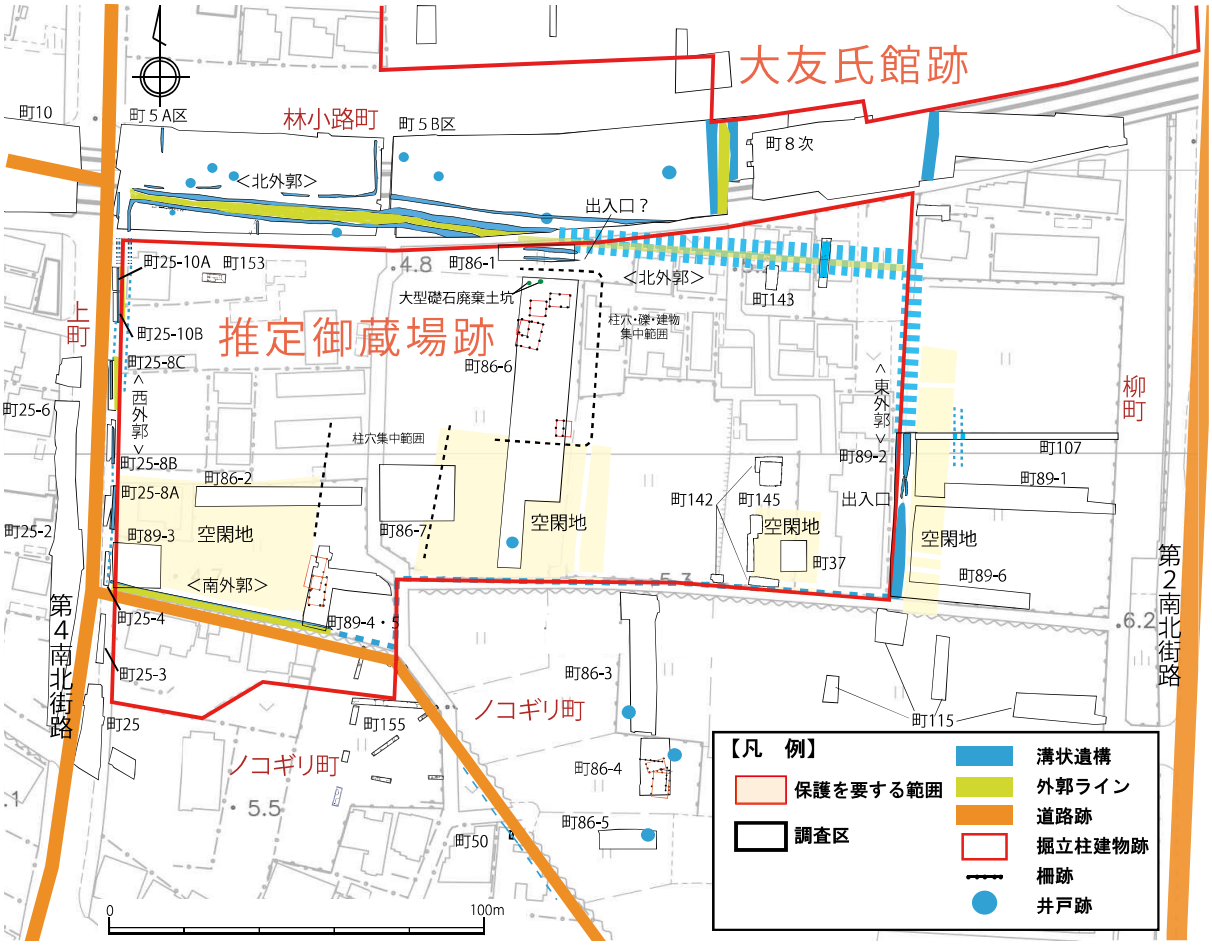


図 3-9　推定御蔵場跡　遺構配置図（16 世紀後半～末頃の遺構を表示：S=1/2000）

③上原館跡

上原館跡は上野台地に立地し、大規模な土塁や空堀を有するため、大友氏館跡と比較すると、防御に特段の配慮がなされた城館である。15 世紀後半以降に整備され、16 世紀後半～末に再整備されたと見られるが、16 世紀代には大友館と併存しており、高崎山山頂にある「高崎城」とともに大友氏の軍事的役割を担う「機能分化した城館」であったと考えられる。上原館跡の規模は東西 130 m、南北 156 mであり、この北西部に南北 40 m、東西 30 mの張り出し部をもっている。周囲（西・南・東面）には幅 1 ～ 30 mの空堀がめぐる。現状で基底部幅約 17 m、高さ 4 mを超える土塁と堀跡の一部が良好に残っており、当時の面影を今に伝えている。

上原館跡は天正 14 年（1586）の島津氏侵攻を受けた後、近世府内城が完成するまでの間、当主の拠点として機能していたことが想定されている。発掘調査による内部の空間配置の究明を行うとともに、近世城郭として再整備された可能性についても明らかにする必要がある。

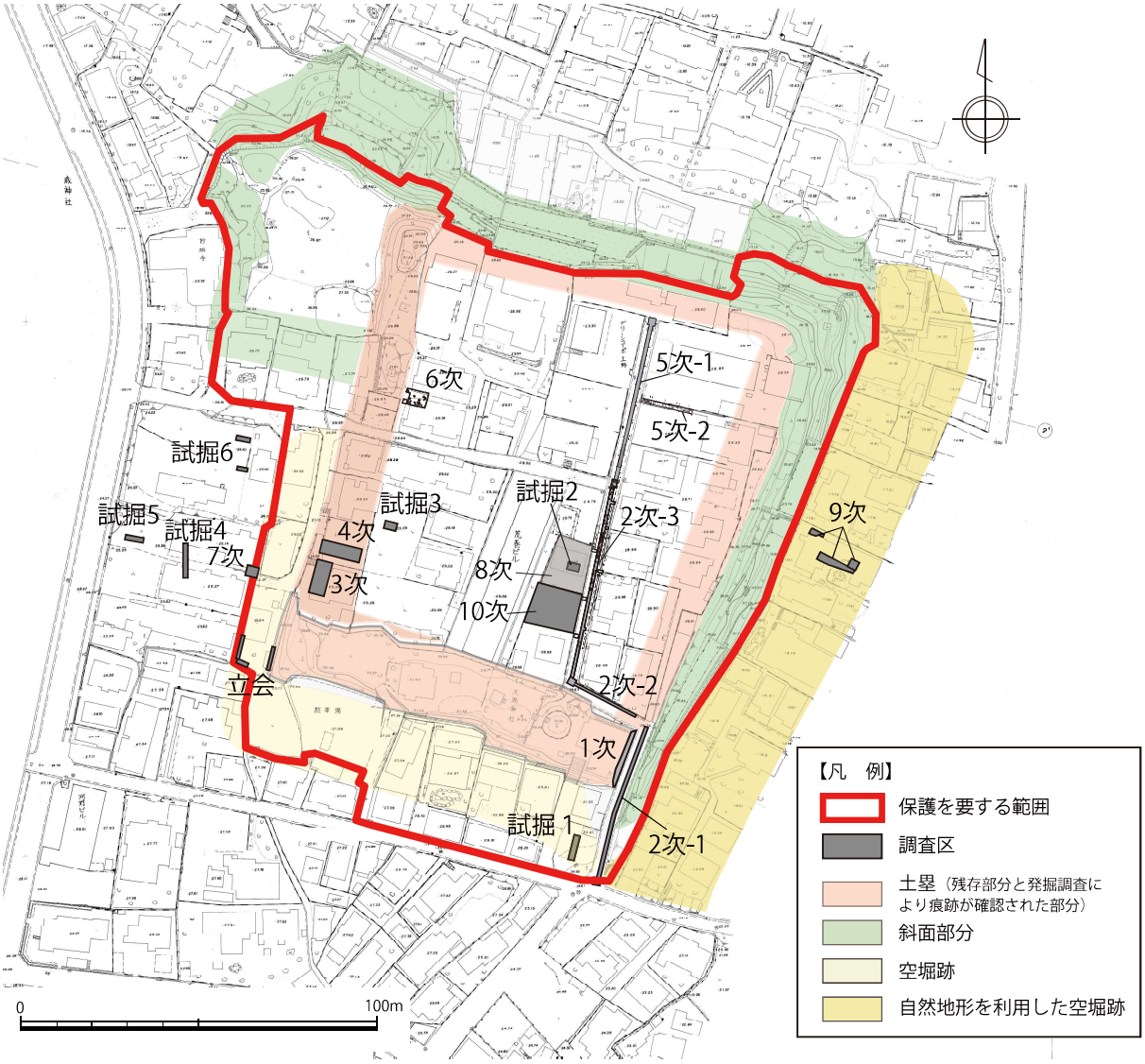


図 3-10　上原館跡　遺構配置図（S=1/2000）

4. 利便施設用地の概要

利便施設用地（図 3-11）

大友氏遺跡歴史公園において、史跡と一体的に活用を図る地区として位置付けている「利便施設用地」とは、歴史公園予定地内にあって、史跡の公開に必要な諸施設を整備する地区である。利便施設用地には、歴史公園の導入部として駐車場やトイレ、休憩施設等とともに、大友氏遺跡を中心とした歴史ガイダンス機能や資料展示機能、飲食・物販機能等、複合的な機能を有する歴史文化観光拠点施設を整備することで、観光拠点としての役割を担い、多くの来訪者が集い交流できる空間づくりを目指すものである。

利便施設用地は、具体的に大友氏館跡の北側（利便施設Ａ）、西側（利便施設Ｂ）、ＪＲ日豊本線を越えて南側（利便施設Ｃ）の３つの地区を指す。このうち、第１期整備においては、利便施設ＡとＢを対象として、史跡の公開活用とあわせて整備を検討するものとする。

また、本計画の短期整備期間において、利便施設用地の一部について公有化を図り、大友氏館跡庭園の見学者や南蛮ＢＶＮＧＯ交流館への来館者が利用できるよう駐車場として整備したが、今後、残余の土地についても取得を検討していく。

線路敷ボードウォーク広場（図 3-11）

大分駅付近連続立体交差事業により生じた鉄道残存敷について、平成 29（2017）年度に基本設計、平成 30 年度に実施設計を行って工事に着工し、令和元（2019）年度に「線路敷ボードウォーク広場」として完成した。

線路敷ボードウォーク広場は、ＪＲ大分駅から大友氏館跡までの約 1.3km（歩行距離）のうち、第２駅南住宅付近から大友氏館跡南側中央までの約 440 ｍを整備の対象とし、「大友氏遺跡へと続く大分歴史回廊」の中核をなすエリアとして、人々の誘導を積極的に図ることを目的とする。

大友氏遺跡歴史公園の南側に接していることから、「大友氏遺跡へのプロムナードとなる長い広場」として位置付け、一体となってその価値を高め、活用に資するために、歩行者と自転車が通行できる遊歩道とともに、修景のための植栽、大友氏館跡庭園を展望する眺望デッキ（ウッドデッキ）などが整備された。

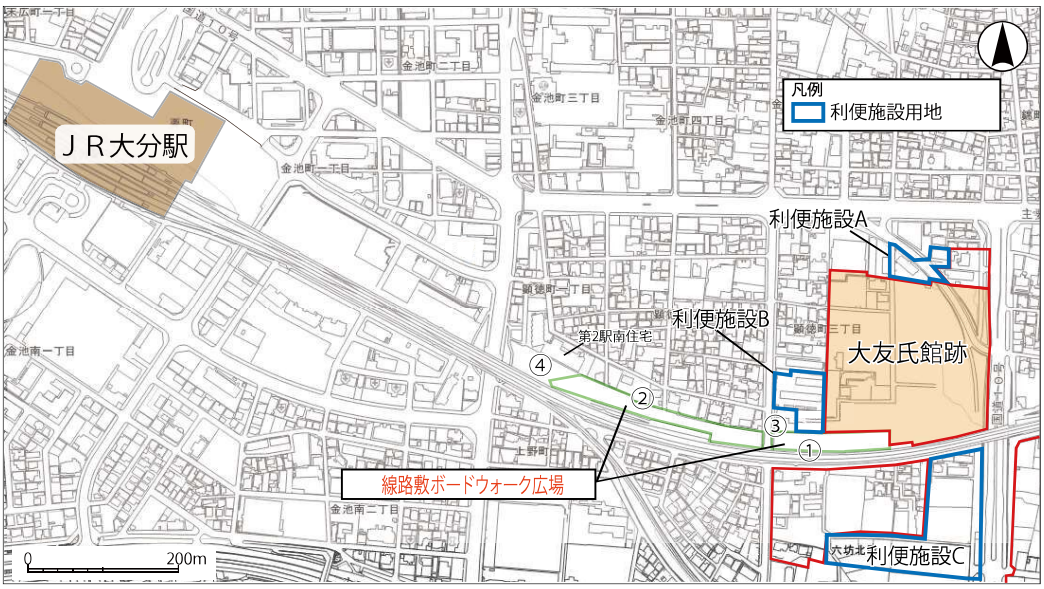


図 3-11　利便施設用地及び線路敷ボードウォーク広場整備箇所位置図

北東より望む（手前に南蛮ＢＶＮＧＯ交流館）

西より望む

線路敷ボードウォーク広場整備状況

5. 中期整備における取組

中期整備での、今後の取組について項目別に整理したものを以下の表 3-35・36 に示す。

令和元（2019）年度の改訂以降、歩行者や車利用者に向けた案内標識の設置については整備が進んでいる。公共交通機関についても、市内中心部の循環バスの新たな経路も設定することができている。歴史公園整備に向けた景観の考え方は、景観シミュレーション等を行い、今後具体的な取組を進めるための基礎情報の収集を行っている。よって、歴史公園整備の周辺環境の整備は整いつつある。令和 5(2023) 年度の改訂計画からは、表に記載しているような史跡地内の条件・課題について具体的な検討を進め、取り組むものとする。

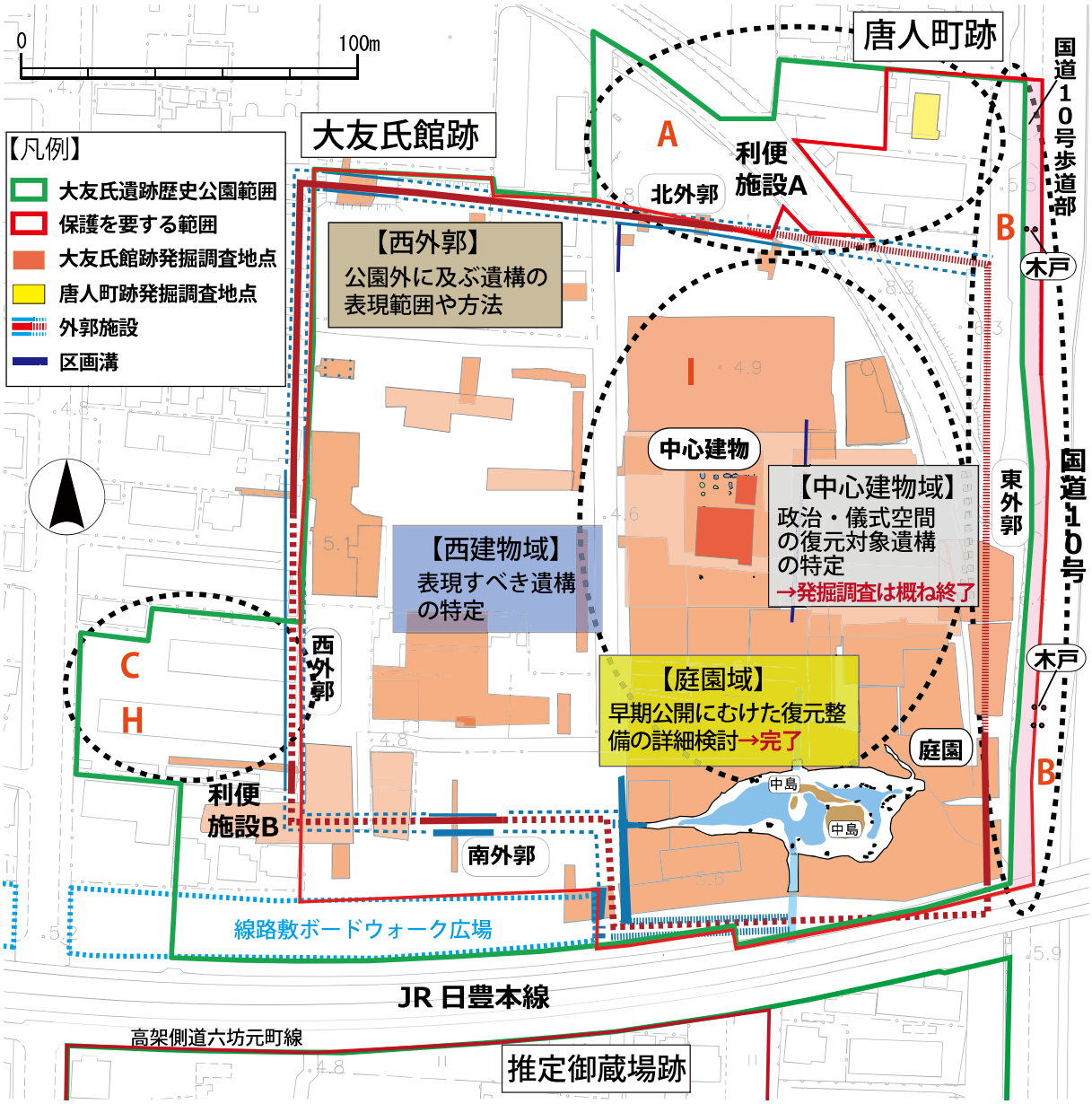


図 3-12　中期整備に向けた取組内容 地点位置図

表 3-34　中期整備における取組表①

取組項目	内　　容	詳細内容
A. 遺跡保存に関する取組 （大友氏館跡・唐人町跡）	①公園予定地内の市道について	公園内市道の一部（市道顕徳 8・9 号線）の取り扱いについて、道路管理者・地元と十分な協議・調査を行う。
	②旧 10 号指定	市道顕徳 10 号線（旧国道 10 号）の史跡指定を行うために、地元及び道路管理者と協議を行う。
	③国道 10 号歩道指定	国道 10 号歩道部には、大友氏館跡の一部が保存されており、今後、史跡の指定について国交省と協議を行う。
B. 復元整備に関する取組 （大友氏館跡・唐人町跡）	①国道 10 号歩道部の整備と活用	歴史公園への入口として機能するだけではなく、当時の都市空間を表現する場所として、歴史公園と一体的な整備活用に向けて関係機関と協議するとともに、館前を通るメインストリート（南北道路）の表示及び木戸の表現方法等について検討する。
	②大友館大門跡等の取り扱い	大友氏館跡の正門としての大門跡等が確認されていることから、これを大友氏館の主要動線として活用できるよう検討する。
C. 公開活用に関する取組 （利便施設・その他周辺）	①第 1 期整備における歴史文化観光拠点施設	歴史文化観光拠点施設は、第 1 期整備の中で建設場所や、施設の内容・規模・管理運営方法について検討し、整備を行う。
D. 史跡整備上の取組 （大友氏遺跡）	①既設管整理	既設の上下水道管は再利用・新設の整理を行い、基本設計に反映させる。
	②下水道管の取り扱いについて	歴史公園全体における排水計画を検討し、適切に処理できる能力を有し、遺構保存を考慮した経路を設定する。
	③水道管の扱い	歴史公園の管理・運営・活用で必要とする上水道計画を定め、遺構保存を考慮した経路を設定する。
	④電柱整理と電源供給について	歴史公園として良好な景観の形成と敷地を有効的に活用するため既設電柱は撤去する。その上で、公園管理及び活用に必要な電源の確保とその手法を検討する。
	⑤工業用水路等の取り扱いについて	工業用水管や汚水管が歴史公園予定地の地下に埋設されているため、遺構保存との調整を図りながら、史跡整備に向けて撤去等、その取り扱いについて検討する。
	⑥未撤去基礎等撤去	史跡を公有化する際、既存の住宅等の浄化槽や建物基礎など地下埋設物の多くが残存しているため、整備工事に先立って、遺構保存を図りながら撤去する。
	⑦整備基金の設置	大友氏遺跡を大分市のシンボルとして、産官民一体となって 整備事業を円滑に進める機運を醸成するとともに、財源の確保に向けて積極的に基金を募る。
	⑧国の支援確保	大友氏遺跡の史跡整備の財源確保として国の支援を受けられるよう、働きかける。
E. 交通アクセス - 動線に関する取組	①公共交通機関の充実	大友氏館跡への来訪者が利用しやすい公共交通機関のあり方を検討する。
	②交通拠点からの効果的な案内	来訪者が大友氏館跡に向かうための起点となる大分駅からの適切な案内・誘導を行う。
	③駐車場の整備	中心建物の整備に合わせ、大型バス、普通乗用車、タクシーの駐車・待機場所、二輪・自転車の駐輪場の整備を行う。不法駐車の対策についても検討をしておく。
	④案内標識と車の動線	自家用車等の利用者が歴史公園へ円滑に訪れることができるよう、既設の案内標識の検証を行う。

表 3-35　中期整備における取組表②

取組項目	内　　容	詳細内容
F. 情報発信及び活用に関する取組	①大友氏遺跡の認知度の向上	歴史文化遺産としての価値が高い大友氏遺跡の認知度をさらに高めるため、効果的な情報発信・宣伝方法について検討し、取り組む。
	②市民や民間組織との連携化	行政機関だけでなく市民の参加による史跡整備の手法について検討する。官民が連携した歴史公園を活用したイベントの運営方法や内容について検討し、実施に向けて取り組む。
	③次世代への浸透・定着	大友氏遺跡を小中学生をはじめとする若い世代に浸透させて、郷土愛の醸成につなげていく。
	④学校教育や生涯学習との連携	史跡や歴史文化観光拠点施設を、学校教育や生涯学習の学びの場としてどのように活用を図っていくのかを関係部署・機関とともに検討する。
	⑤ボランティアと連携	ボランティアガイドの技術や知識の向上、大友氏に関する情報が適切に更新できるよう、定期的に研修等を実施する。
	⑥史跡公園の多目的利用	地域住民や利用者の愛着がわく歴史公園や施設整備を実施するための検討を行う。
	⑦大友氏遺跡出土重要文化財ほか関連資料の展示	重要文化財となった大友氏遺跡出土資料 (県所蔵) をはじめ、将来重要文化財に指定される見込みの市調査分の出土資料の適切な展示・公開のための手法・施設について検討を行う。
	⑧大友氏遺跡出土資料の重要文化財指定	市が実施した発掘調査で出土した資料について、国の重要文化財指定に向けた作業を進める。
G. 周辺整備に関する取組	①景観形成	良好な景観を形成するため、歴史公園周辺の建築物や広告に対しての規制や、景観維持・形成に向けた手法を検討する。
	②回遊性の確保	「府内城跡」等、他の近隣史跡や観光施設等を含めた回遊性を高めるため取組を検討する。
H. 歴史文化観光拠点施設に関する取組	①施設の規模	歴史文化観光拠点施設に求められる機能に応じた適切な規模を検討する。
	②中心建物域（復元建物）との機能分担	史跡地内に復元整備される中心建物の活用と一体的な機能を有し、相互が補完し合えるようなあり方について検討する。
	③整備運営手法	整備運営手法の可能性調査を実施したうえで、民間活力等の導入について検討する必要がある。
	④飲食や商業施設との連携	歴史文化観光拠点施設に計画するレストランやカフェ設置等の必要性の有無と周辺の類似店舗や商業施設との関係性を整理する。
	⑤地元物産販売の販路拡大	歴史文化観光拠点施設等で地元物産販売や販路拡大に必要な要素ついて調査・検討する。
I. 建造物の復元について	①法令適用除外について	立体復元を行う建物については、建築基準法や消防法等、法令尊守し、かつ、当時の建物の外観を忠実なものとするための、手法の検討を行う。
	②内部について	建物内部の意匠については、史資料を参考に可能な限り復元を検討する。
	③活用について	立体復元を行う建物の活用については、戦国時代の年中行事の再現等、来館者に戦国期の大名館で何が行われたのか理解してもらえるよう工夫する必要がある。
J. 整備後の管理運営について	①日常的な公園利用と管理運営	夜間の利用、年末年始の利用等の制限、開園時間、諸施設の料金徴収の考え方は、各施設の整備が完成するまでに取り決める。
	②継続的な発掘調査の体制について	整備後においても、継続的に確認調査を実施するが、発掘調査後の整理体制及び公開について検討する。
	③官民運営	調査研究・学芸業務、施設や公園の管理運営等の役割分担と運営体制について検討し、民間活力を運営にどのように活かせるか、適切な業務委託の在り方、人材育成・支援、産官学の連携等、具体的に検討を進める。
	④法的整備	歴史公園の管理運営について条例等の整備について検討を始める。

6. 短期整備完了から中期整備の進捗状況

（1）令和元年度までの整備計画進捗状況

平成 27 年（2015）12 月に策定した整備基本計画では、計画策定の年からおおむね 5 年間を短期整備期間と定め、事業を進めてきた。整備基本計画の改訂を行った短期整備最終年である令和元（2019）年度の段階では、大友氏館跡庭園遺構の整備が完了し、中心建物域の報告書が刊行された。そして中心建物域の検討成果については、「令和 5 年度版」において反映した。大友氏館跡の公有化については、ほぼ民有地も買上げが完了している。また、利便施設用地Ａ・Ｂについても、公有化が完了した一部について、大友氏館跡庭園や南蛮ＢＶＮＧＯ交流館等の見学者の駐車場として整備を行った。

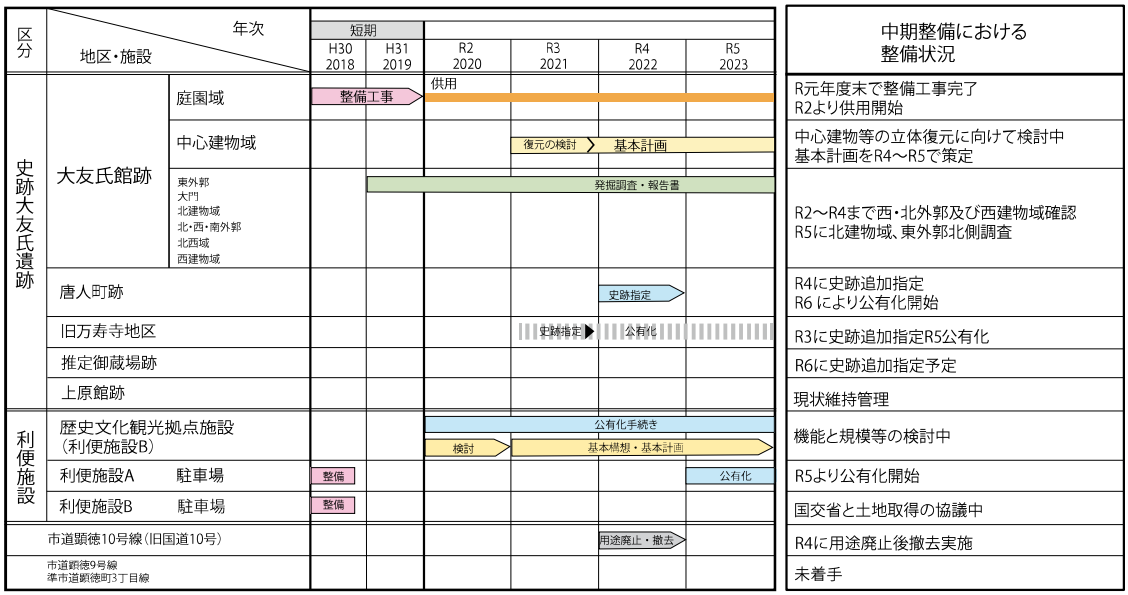
（2）令和 5（2023）年度までの進捗状況

令和 5（2023）年度段階における計画の進捗状況は、下表のとおりである。

このうち、大友氏館跡庭園遺構の整備については、計画通り令和元（2019）年度末に完了し、令和 2 年（2020）6 月より供用開始した。また、令和 3（2021）年度には、中心建物及び中心建物域等の整備を進めるため大友氏館跡建造物等復元検討委員会を設置し、立体復元に向けた検討を行っている。発掘調査は、令和 2（2020）年度から、現在の大友氏館跡の中心に位置する市道顕徳町 9 号線より西側、館西建物域の調査を中心に進め、一部東外郭域についても行った。館西建物域の調査は、令和 4（2022）年度までに一部が完了し、令和 5（2023）年度は、門の確認を目的とした東側外郭域、北側外郭と北建物域の遺跡を把握するために調査を実施している。

表 3-36　第 1 期整備（中期整備）の進捗状況

■第 1 期整備（中期）事業工程



『史跡大友氏遺跡整備基本計画（第1期）』令和元年度改訂版　118頁より

大友氏遺跡の公有化については、旧万寿寺地区は、敷地東側の大分川隣接地の公有化を令和５（2023）年度から行い、唐人町跡では、令和４（2022）年度に史跡指定され、公有化に向けて取り組んでいる。今後は、推定御蔵場跡においても必要に応じて追加の公有化を進める計画である。

利便施設に関しては、現在、大友氏館跡南外郭エリアにおいて、仮ガイダンス「南蛮ＢＶＮＧＯ交流館」を設置し運用している。歴史公園の整備を進める中で、利便施設Ｂに「歴史文化観光拠点施設」として機能を移すことも庁内で検討していく。

市道顕徳 10 号線は、計画通り令和４（2022）年度に用途廃止を行って、同年中に撤去を完了した。なお、市道顕徳９号線や準市道顕徳町３丁目線は、現段階では未着手であるが、歴史公園整備工事着手までには用途廃止及び撤去を実施する計画である。

（3）庭園遺構の整備

整備までの経過

平成 27 年（2015）12 月に策定した『整備基本計画』では、大友氏遺跡歴史公園内を６つの地区にゾーニングし（図 4-3）、各ゾーンの整備の方向性を示した。庭園遺構は、大友氏遺跡（大友館）の特徴をあらわす主要な場所であることから積極的に復元整備を行い、空間体験を通じた歴史学習の場として公開活用を目指す「歴史体験（復元）ゾーン」として位置づけられた。

第１期計画の対象地は広大で、完成には 15 年間の事業期間を要する（平成 27：2015 年当時）ことから、段階的な整備・活用を図るため、まず、短期整備とした前半の５年間に庭園域の整備事業と供用開始を行うことを決定した。

事業は、平成 28（2016）年度から基本設計に着手し、確認調査の成果・評価に基づき、遺構保護や、景石、州浜、中島、植栽などの整備の内容や根拠、手法等を取りまとめ、管理における基本的な考え方を示した。平成 29（2017）年度は、庭園遺構の復元整備や公開活用に係る諸施設等の設置・設計について検討を行った。併せて、整備工事に必要な土量等を計るための敷地測量、遺構の保護材の材料工法を選定するための試験・検証を行い、実施設計図書を作成した。

庭園遺構の整備における基本方針

庭園遺構の中でも、園池は館Ⅲ期（15 世紀後葉）から館Ⅵ期（16 世紀末）まで改修されながら存続するが、『整備基本計画』に基づき、庭園遺構の整備の対象となる時期は館Ⅴ期（16 世紀後半）に設定される。しかし、館廃絶時において、園池に配置されていた景石は割られ・倒され、州浜の石も取られ、特に園池の東側は大きく破壊されていた。園池の西側は、戦国時代の園池の姿が比較的残され、この様相が異なる園池内の東西をどのようなかたちで表現するかが課題の一つとなった。また、館Ⅵ期段階では復興した町屋に関連する溜め池状の施設として部分的に改修され機能していた。そのため館Ⅵ期の遺構やその埋土は、大友館廃絶後の土地利用に関わる行為として、歴史的位置づけも高いことから、全て除去せず保存することとなった。このような課題を考慮し検討の結果、基本方針は以下のとおり決定した。

【遺構保存に関する基本方針】

・園池跡はすべて埋土保存を行う。

・園池東側は館Ⅵ期の遺構を保存するため保護盛土を行い、レプリカを製作し、復元設置する。

・園池西側は館Ⅵ期の遺構が少ないため、戦国時代の姿を良好に残す景石は露出展示とする。保護盛土は遺構保護と露出展示のバランスを保つ程度とする。

【遺構復元に関する基本方針】

・発掘調査の分析でも確認された池水を溜めて整備を行う。

・調査成果や分析結果に基づき、植栽を行う。

・作庭時の姿が損なわれている護岸や築山、原位置を保っていない景石等は、本来の形状や位置について復元想定を行い、確認された遺構遺物を根拠として、解釈される範囲で整備を行う。

整備工事

大友氏館跡庭園遺構の整備工事は、平成 30 年（2018）から本格的に着手し、平成 30 年は園池跡（中島、州浜、景石復元設置など含む）及び推定築山部の整備と植栽整備工事、配管工事の一部を行った。令和元（2019）年度は、遺構表示、園路整備、植栽、機械（給排水）設備、電気設備工事を実施し、概ね 1 年半で完了した。

大友氏館跡庭園の管理

庭園遺構整備では成長木を多数植栽している。当初は葉張りが弱く、枝の伸長が遅いなど成長が危惧されたが、整備工事が完了して約 4 年が経過し、葉付きもよくなり、量も増えてきたことから、ようやく落ち着いたところである。安定して活着させることが大切であるため、工事完了から 5 年間程度は大規模な刈込や剪定は避け、日照や通風を滞らせない程度、虫害を防ぐといった最小限の管理に留めておき、今後進んでいく大友氏館跡の整備の進捗とともに、本市の風土に適した管理計画、樹形計画、補植等の計画を検討していく必要がある。

ＧＲＣ材で複製品製作した景石や露出展示している実物景石は、日照・風雨による経年劣化が進むことが予測されるため、割れやヒビ、剥離といった毀損の有無、色調の変化といった部分について定期的な観察が必要であろう。特に露出している景石については、温湿度の急激な変化による塩害風化による表面剥離の恐れがあるため、保存方針の検討が今後必要になると考えられる。園池内は夏から秋にかけて地下水量が多くなることで水位が上昇することがある。その影響が激しい場合、地下水が整備の基盤である改良土と景石設置面の隙間から溢れ、ヒビ、割れ、脆弱化が進むことにより最悪陥没するといった事態が想定される。遺跡の保存等に大きく影響するため、特に地下水が豊富な時期については改良土の観察を注意しておくべきである。年ごとの天候に留意しつつ、場合によっては、地下水位量や水位調査が必要である。